上峰町文化財調査報告書第24集

船石遺跡VI
船石南遺跡IV

平成11年度佐賀県営かんがい排水事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第24集

船石遺跡VI

船石南遺跡IV

平成11年度佐賀県営かんがい排水事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月

上峰町教育委員会

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う県営かんがい排水事業が平成11年度より開始されました。

この報告書は、平成11年度に実施した船石遺跡及び船石南遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。両遺跡は、昭和60年度～平成元年度の農業基盤整備事業に伴い発掘調査を実施しましたが、弥生時代の集落跡や甕棺墓をはじめとする墳墓が検出され、当時の集落と墓域のあり方を考える上で貴重な資料となっております。今回の発掘調査は、かんがい排水の導水管埋設工事に伴う限られた範囲の調査ではありましたが、住居跡等の遺構が高い密度で検出され、過去の農業基盤整備事業に伴う発掘調査で得られた情報を補充する貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成15年３月

上峰町教育委員会

教育長　八　谷　日出夫

例　言

1．本書は、平成11年度の佐賀県営かんがい排水事業に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県農林部の委託事業として発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷に所在する船石遺跡及び船石南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成14年度佐賀県営農林業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県農林部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。

3．発掘調査は、平成11年度の佐賀県営かんがい排水事業に伴う導水管路埋設工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、便宜的な調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。

4．調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成11年度	船石遺跡	12区	520㎡	平成11年11月24日 ～ 平成12年３月３日
	船石南遺跡	７区	80㎡	

5．現場での遺構実測作業は、調査員の指示により、実測作業員が行った。

6．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。

8．本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。

9．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。

10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1．船石遺跡及び船石南遺跡の略号は、それぞれ「FNI」、「FIM」であり、調査区略号は、「FNI-12」、「FIM-8」とした。

2．遺構番号は、遺構の種別を表す２文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの２桁の番号を組み合わせて表記した。

SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址　SK……土壙　SD……溝跡・溝状遺構

SX……性格不明遺構・その他

例）SH1201　12区の１号竪穴式住居址　SK815　８区の15号土壙

3．本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。

4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。

5．土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。

6．土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。同図中のヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。

7．遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。

調 査 組 織

調査事務局	総　括	福　島　　毅	上峰町教育委員会	教育長職務代理者
			（平成11年４月１日～５月31日）	
		古　賀　一　守	〃	教育長
	事務主任	福　島　　毅	〃	教育課長
	経費執行	原　田　大　介	〃	文化係長
		樋　口　佳　子	〃	社会教育係
調査組織	調査員	原　田　大　介	上峰町教育委員会	文化係長
調査指導		佐賀県教育委員会		

発掘作業参加者

秋山　巌、秋山ユキエ、石橋テル、石丸ミチエ、江口照代、江越　晋、大石貞義、緒方ツタエ、北島光男、久仏衣江、最所和子、執行一水、執行ミハル、島　四郎、志波正千、高島　昇、高島蔦枝、田中ミスエ、田中　豊、鶴田　馨、鶴田キヨ子、鶴田竹次、鶴田末友、鶴田八重子、福島一雄、松尾キミエ、松尾トシエ、馬原喜美子、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山田満穂、吉田英子（発掘作業員）
岩下貴子、坂本恵子、島　美保子、田尻祐子（実測作業員）

整理作業参加者

島　美保子、田尻祐子（製図作業員）

目　次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．船石遺跡及び船石南遺跡の位置 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 7

1．調査に至る経緯 …… 7

2．調査の経過 …… 7

Ⅲ．調　査 …… 9

1．遺跡と調査区の概要 …… 9

2．船石遺跡12区の調査 …… 9

(1)　遺構 …… 9

(2)　遺物 …… 23

3．船石南遺跡８区の調査 …… 34

(1)　遺構 …… 34

(2)　遺物 …… 36

4．まとめ …… 36

挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000） …… 2

Fig. 2　船石遺跡・船石南原遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000） …… 3

Fig. 3　船石遺跡・船石南原遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000） …… 10

Fig. 4　船石遺跡12区 遺構配置図（1/200） …… 11

Fig. 5　船石遺跡12区 竪穴式住居址実測図（1）（1/80） …… 17

Fig. 6　船石遺跡12区 竪穴式住居址実測図（2）（1/80） …… 18

Fig. 7　船石遺跡12区 竪穴式住居址実測図（3）（1/80） …… 19

Fig. 8　船石遺跡12区 竪穴式住居址実測図（4）（1/80） …… 20

Fig. 9　船石遺跡12区 土壙実測図（1）（1/60） …… 21

Fig.10　船石遺跡12区 土壙実測図（2）（1/60） …… 22

Fig.11　船石遺跡12区 出土遺物実測図（1）（1/4） …… 28

Fig.12　船石遺跡12区 出土遺物実測図（2）（1/4） …… 29
Fig.13　船石遺跡12区 出土遺物実測図（3）（1/4） …… 30
Fig.14　船石遺跡12区 出土遺物実測図（4）（1/4） …… 31
Fig.15　船石遺跡12区 出土遺物実測図（5）（1/4） …… 32
Fig.16　船石遺跡12区 出土遺物実測図（6）（1/4） …… 33
Fig.17　船石遺跡12区 出土遺物実測図（7）（1/4） …… 34
Fig.18　船石南遺跡８区 遺構配置図・遺構実測図・出土遺物実測図 …… 35

表　目　次

Tab.1　船石遺跡12区出土竪穴式住居址一覧表 …… 16
Tab.2　船石遺跡12区出土土壙一覧表 …… 22
Tab.3　船石遺跡12区出土土製品・石製品一覧表 …… 34
報告書抄録

図 版 目 次

PL.1　船石遺跡12区・船石南遺跡８区
PL.2　船石遺跡12区　遺構（1）
PL.3　船石遺跡12区　遺構（2）
PL.4　船石遺跡12区　遺構（3）
PL.5　船石遺跡12区　遺構（4）
PL.6　船石遺跡12区　遺構（5）
PL.7　船石遺跡12区　遺構（6）
PL.8　船石遺跡12区　遺構（7）
PL.9　船石遺跡12区　遺構（8）
PL.10　船石遺跡12区　遺構（9）
PL.11　船石遺跡12区　遺構（10）
PL.12　船石遺跡12区　遺構（11）・遺物（1）
PL.13　船石遺跡12区　遺物（2）
PL.14　船石遺跡12区　遺物（3）
PL.15　船石遺跡12区　遺物（4）
PL.16　船石遺跡12区　遺物（5）
PL.17　船石遺跡12区　遺物（6）
PL.18　船石南遺跡８区　遺構・遺物

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．船石遺跡及び船石南遺跡の位置（Fig. 1・2）

船石遺跡及び船石南遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った船石遺跡及び船石南遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓に源を発する切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の開析作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成11年度の県営かんがい排水事業に伴い調査を実施した船石遺跡及び船石南遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に所在し、船石遺跡は切通川東岸の船石丘陵上の標高14～30m付近に、また船石南遺跡は船石丘陵南端から南東に派生した一支丘上の標高14～17m付近に位置している。両遺跡が立地する船石丘陵は、中原町高柳集落付近から派生し、本町船石集落を経て、JR長崎本線の南、切通集落の北で平野に没する低位の段丘で、東方の船石工業団地遺跡群が立地する丘陵とは切通川支流船石川によって、北西方の八藤遺跡が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大谷川によって、西方の二塚山遺跡群が立地する二塚山丘陵とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。

2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、埋納された12本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東脊振の２町１村にまたがる吉野ケ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代

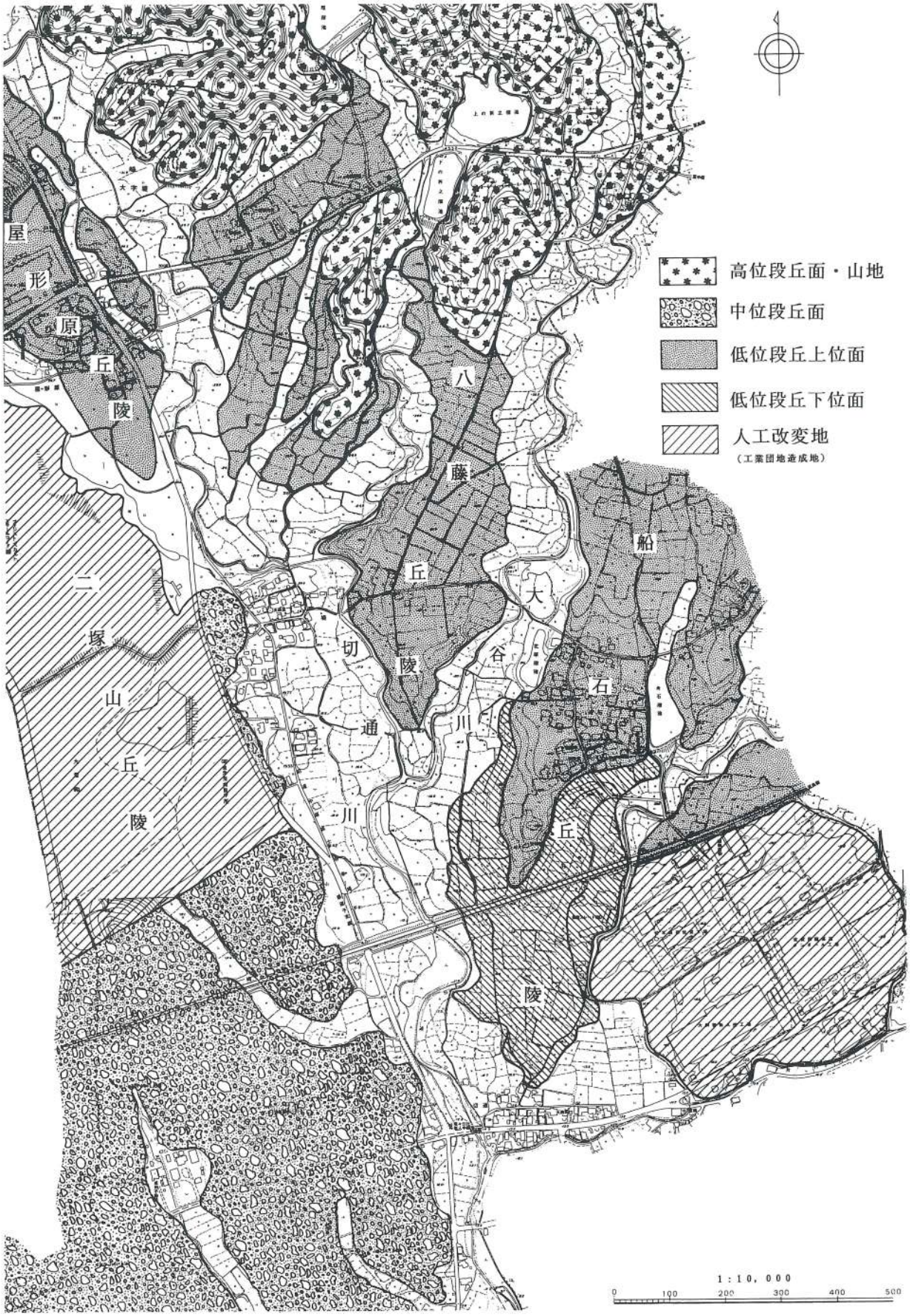


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 堤六本谷遺跡
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 **船石遺跡**
18 **船石南遺跡**
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 上米多貝塚
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 2　船石南遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近のアカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、中原町香田遺跡[9]や東脊振村戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成2年度から5年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、神埼郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、中原町姫方古墳[23]、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目達原古墳群[24]、神埼郡神埼町伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀郡大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保-鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部(あやべ)・米多(めた)郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあた「都紀女加(つきめか)」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神埼郡三田川町東部の一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稲荷塚などの前方後円墳6基ほか古稲荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中杖遺跡[30]、同郡東脊振村下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在でははとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、潅漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次 『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』 鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980
2）木下 巧・天本洋一 『姫方遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
3）七田忠昭 『検見谷遺跡』 北茂安町文化財調査報告書第２集 北茂安町教育委員会 1986
4）金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
5）七田忠昭他 『吉野ヶ里』 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
6）原田大介 『八藤遺跡III』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
7）七田忠志 「原始」『上峰村史』 上峰村 1979
8）下山正一・西田民雄 「II．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
9）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」『香田遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２ 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
10）七田忠志 「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』 ６－２・４ 1934
11）原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
12）原田大介 『八藤遺跡II・堤土塁跡II』 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出（6）
13）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
14）高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
15）七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
16）七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
17）鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡II図録編』 上峰村文化財調査報告書第６集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡II本文編』 上峰村文化財調査報告書第７集 上峰村教育委員会 1989
18）昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
19）原田大介 『八藤遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
20）木下巧他 『姫方原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
21）木下 巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
22）石橋新次 『剣塚前方後円墳』 鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
23）前出（2）
24）松尾禎作 「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第９輯 佐賀県教育委員会 1950
25）木下之治 「古代国家の形成」『佐賀県史』 佐賀県 1968
26）木下之治編 『銚子塚』 佐賀市教育委員会 1976
27）松尾禎作 『佐賀県考古大観』 祐徳博物館 1959
28）前出（24）
29）前出（16）
30）七田忠昭・高山久美子・西田和己 『下中杖遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
31）高瀬哲郎他 「下石動遺跡」『下石動遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
32）松尾禎作 「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史債名勝天然記念物調査報告』 第５輯 佐賀県 1936
33）田平徳栄他 『雲仙寺跡』 東脊振村文化財調査報告書第４集 東脊振村教育委員会 1980
34）高島忠平・柾 一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
35）松尾禎作 「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第７輯 佐賀県 1940
36）前出（12）
原田大介 『八藤遺跡III』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
37）平成５、６年度、上峰町教育委員会調査、整理中
38）米倉二郎 「中世」『上峰村史』 上峰村 1979
39）原田大介 『坊所城跡』 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II．調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

今回の発掘調査の契機となった県営かんがい排水事業中原西部線に関する事業計画に伴い埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行ったのは、平成10年10月に開催された「平成11年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」であった。その席上、県営かんがい排水事業中原西部線の工事概要および平成11年度事業として本町切通地区の国道34号線からJR長崎本線までの導水管路埋設工事計画が提示された。

事業対象区域は昭和60～61年度の大字堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業地区内で、事業計画は農業基盤整備事業に伴い整備された南北農道とこれと交差する東西農道の地下約３mの深度に導水管を埋設していくというものであった。農業基盤整備事業当時、この南北農道部分には船石遺跡の、東西農道部分には船石南遺跡の広がりは認められており、遺構については盛り土などを行い現状保存の措置を採った部分であった。このため、教育委員会は、埋蔵文化財包蔵地外への管路埋設法線変更を提案したが、導水管の延長、勾配などの制約で計画変更は難しいとの結論であった。

工事の実施による両遺跡の埋蔵文化財への影響は避けがたく、平成11年度事業として船石遺跡を南北に縦断する形で延長約175m、船石南遺跡を東西に横断する形で延長約27m、幅員約３mの約600m² について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

2．調査の経過

平成11年度の県営かんがい排水事業に伴う発掘調査は、導水管路埋設工事により削平が予定される部分について、船石遺跡側の延長約173m、幅約３mの約520m² の部分を便宜的に船石遺跡12区として、船石南遺跡側の延長約27m、幅約３mの約80m² の部分を便宜的に船石南遺跡８区として、実施した。調査は、工事の進捗にあわせ30mほどのスパンごとに、工事サイドによる表土掘削の後、遺構検出、遺構掘り下げ、写真撮影、遺構実測の作業を行い、調査が終了した部分から導水管を埋設していくという作業サイクルの中で実施した。現地での作業は、平成11年11月24日から26日、平成12年１月４日から１月21日まで、２月７日から３月３日までと工事の進捗にあわせ断続的に行った。以下簡略に調査経過を記す。

平成11年11月24日　船石遺跡を縦断する南北農道北端においてJR長崎本線横断箇所の管路埋設を推進工法で行うための作業縦抗部分、延長８m、幅３mについて、工事サイドの重機による遺構検出面までの土砂掘削作業が開始され、船石遺跡12区の調査に着手した。

25日　遺構検出作業、掘り下げ作業を行い、調査区北端の導水管埋設センターライン上に北から０m～10mのポイントを設定し、これを基準に遺構の実測を行った。26日、遺構の写真撮影を行い縦抗部分の調査を終了した。

平成12年１月４日　船石遺跡12区及び船石南遺跡８区の両調査区に、導水管埋設センターライン上に調査の基準（船石遺跡12区では調査区の北端に、船石南遺跡８区では調査区の東端にそれぞれ０mポイントを設定し、これからの距離によって10mポイント、75mポイントとし、調査の基準とした。以下、「○○mp」と表記する。）とすべく、５日まで、測量ポイントの設定を行った。

６日　船石遺跡12区の北端より10mpから100mp付近までの工区について工事が再開された。約30

mを１スパンとして、工事サイドの重機により遺構確認面までの表土除去後、発掘作業員による遺構検出作業を開始。検出された遺構から逐次掘り下げ作業を行った。以後、掘下げが終了した遺構から写真撮影、実測作業を行った。このスパンごとの作業繰り返しでの作業を続け、21日にこの工区の調査を終了した。

２月７日　残りの105mp付近以南の工区について工事再開。これに伴い、遺構が検出されなくなった175mp付近まで前工区と同様の手順で作業を繰り返し、２月22日、船石遺跡12区の調査を終了した。

２月25日　船石南遺跡を東西に横断する農道上において、最後まで残っていた75mp付近以西の工区について工事着工。95mp付近までを船石南遺跡８区として調査を行った。このスパンの作業は、３月２日まで行った。３月３日、発掘機材類を現場より撤収し、船石遺跡12区、船石南遺跡８区に係る現場での作業をすべて終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、３月９日まで、遺物の水洗い、遺構実測図等の記録類の簡単な整理作業を同事務所にて実施し、作業を終了した。

Ⅲ．調　査

1．遺跡と調査区の概要（Fig. 1、3、4・PL. 1）

船石遺跡及び船石南遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に位置している。船石遺跡は、切通川東岸の「船石丘陵」と呼称する洪積世段丘（標高14～30m付近）上に、また、船石南遺跡は、船石丘陵の先端部からさらに南東へ派生する支丘上（標高14～17m付近）に位置している。

船石遺跡は、戦前より低位段丘上位面の先端（標高21～25m付近）に位置する舟石天神宮境内に古墳とともに「舟石」、「亀石」、「鼻血石」と呼ばれる巨石群の存在が知られ、支石墓ではないかと注目されてきた。その後、昭和57年度の船石地区運動公園整備や昭和61年度から平成元年度の県営農業基盤整備事業に伴い過去５年次にわたる11地区について発掘調査が実施され、縄文時代から中近世に及ぶ各時代の遺構、遺物が検出されている。なかでも、弥生時代の集落及び墳墓がその主体で、町を代表する複合遺跡である。

一方、船石南遺跡は、昭和60年度および62年度の県営農業基盤整備事業に伴い過去２年次にわたり発掘調査が実施され、弥生時代の集落跡とともに甕棺墓をはじめ石棺墓、土壙墓など500基を超える墳墓が検出されている。また、遺跡の東を南流する船石川の東方に位置する船石工業団地内においても工場の建設に伴い多数の甕棺墓が出土したといわれており、一帯に一大墓域を形成している。

このように、船石一帯に広がる船石遺跡、船石南遺跡は、この地域の弥生時代の集落と墓域のあり方を考える上で、貴重な遺跡といえる。

今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、船石遺跡のうち、JR長崎本線以南の大字堤字一本谷付近で、船石丘陵の低位段丘低位面先端付近に当たる。農業基盤整備事業によって整備された幅４mの農道が、遺跡を南北に縦断している部分の延長約175mで、今回はこの区域を船石遺跡12区として調査を実施した。

また、船石南遺跡で今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本谷付近で、船石丘陵から派生する支丘の基部に当たり、農業基盤整備事業によって整備された幅４mの農道が、遺跡を東西に横断している部分の延長約27mで、今回はこの区域を船石南遺跡8区として調査を実施した。

今回の調査は、農道の範囲内という制約で線的な調査区となったため、通常の面的なグリッドは設定せず、埋設される導水管路センターラインを軸にして、船石遺跡12区では調査区北端に、船石南遺跡８区では調査区の東端に、それぞれ０mpを設定し、ここから５mおきにポイントを設定し実施した。

調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、道路下の旧耕作土あるいは底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

両遺跡の今回の調査では、弥生時代中期前半から後期に及ぶ竪穴式住居、土壙などが検出された。

2．船石遺跡12区の調査（Fig. 4～9・PL. 1～11・Tab. 1、2）

(1) 遺　構（Fig. 4～9・PL. 1～11・Tab. 1、2）

今回の船石遺跡12区の調査で検出された遺構は、弥生時代中期前半から後期に及ぶ竪穴式住居址30軒、土壙18基、その他ピットなどであった。しかし、調査区の幅３mという制約の中での調査であったため、土壙の一部とピットを除くといずれの遺構についても完掘できなかった。

また、今回の調査区の110mp以南部分が昭和60年度の農業基盤整備事業に伴い船石遺跡３区として発掘調査を実施した調査区の東側境界に隣接していることから、昭和61年当時調査区東側境界付近で検出され一部しか調査

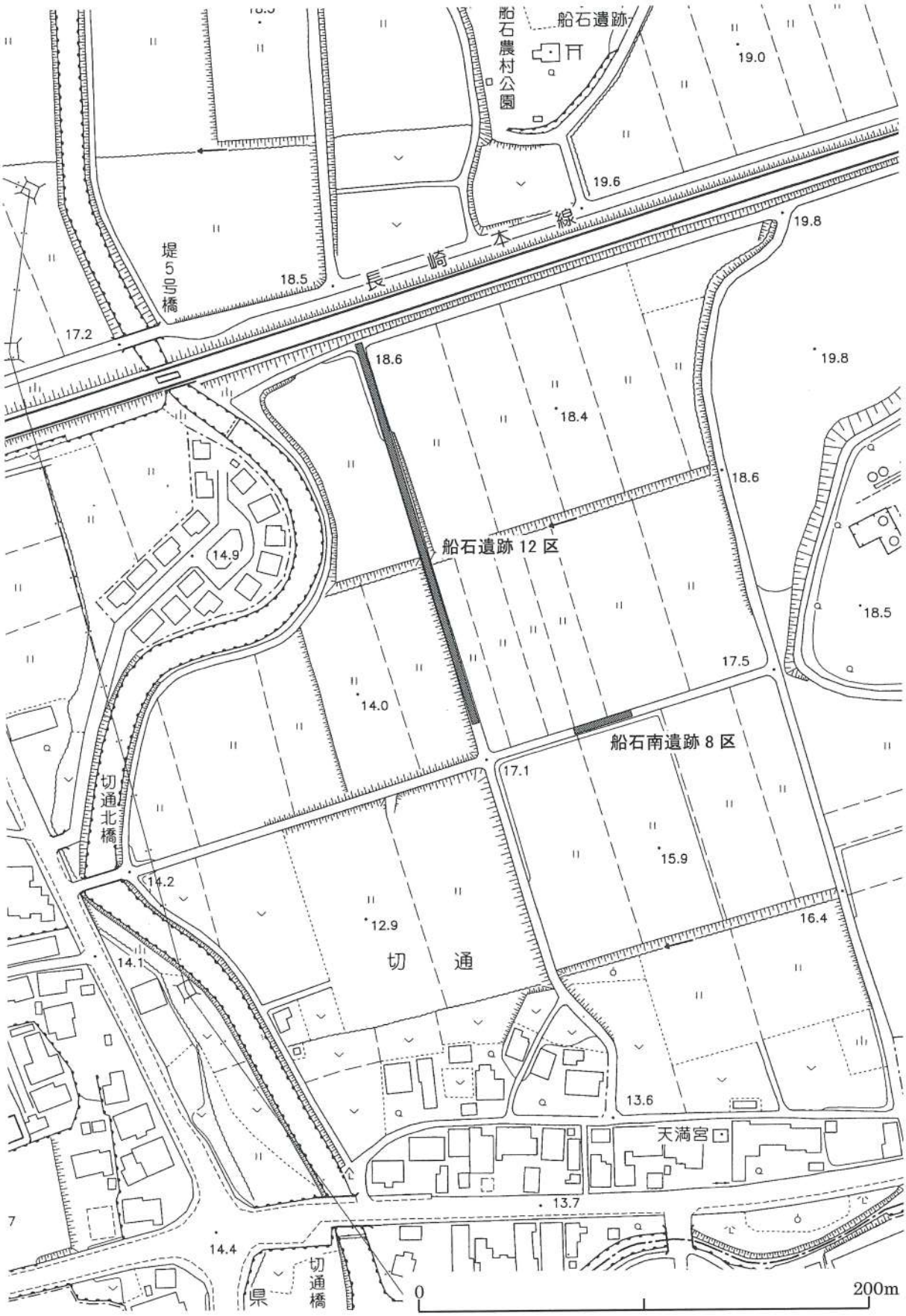


Fig. 3　船石遺跡・船石南遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

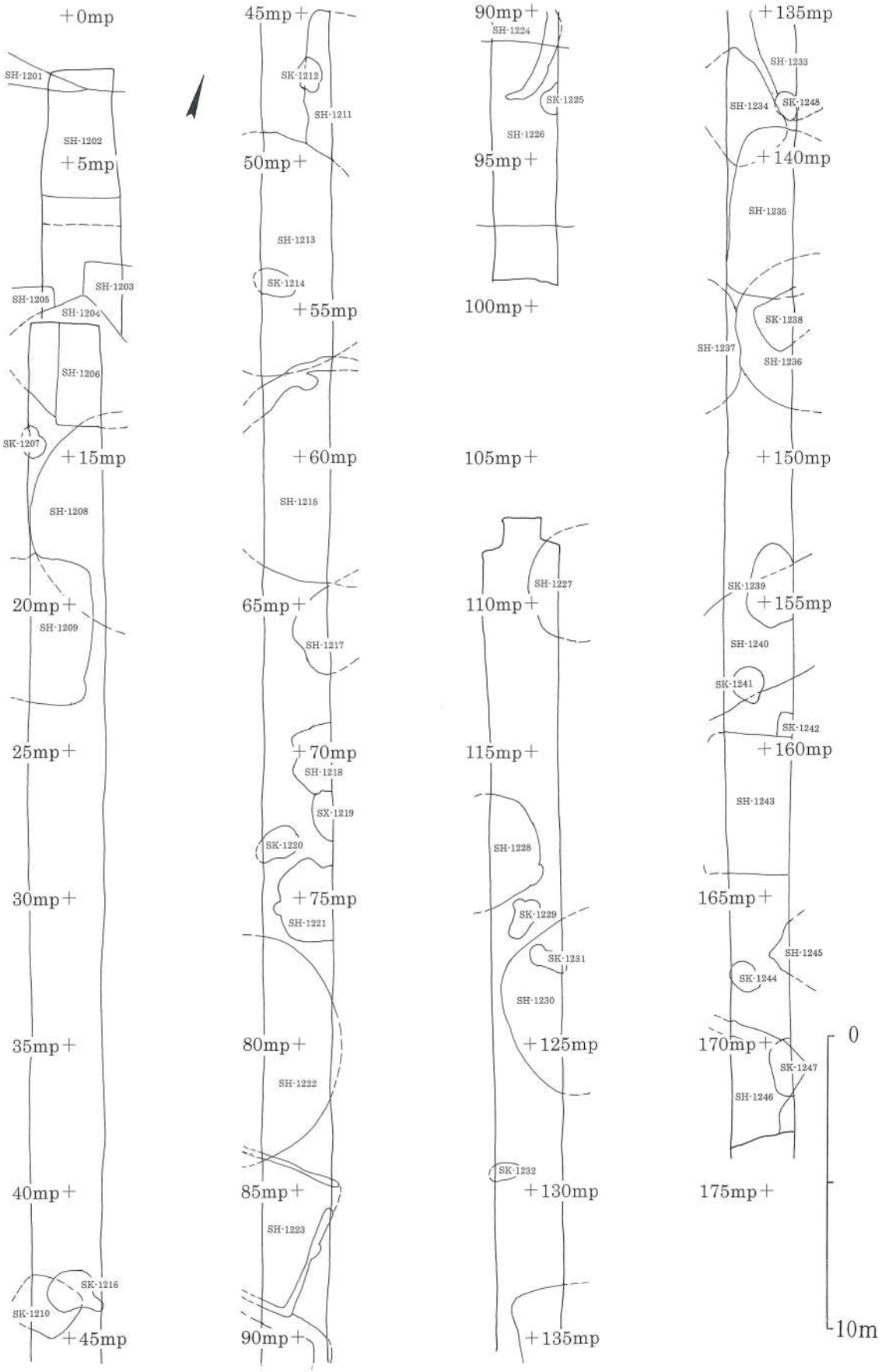


Fig. 4　船石遺跡12区　遺構配置図（1/200）

できなかった住居址などの遺構について、今回連続する部分が検出されることも期待されたが、そのような事例は皆無であった。

竪穴式住居址（Fig. 4 ～ 8 ・PL. 1 ～10・Tab. 1）

今回の調査で、竪穴式住居址として取り扱った遺構は、30軒に及ぶ。前述のように、調査区の幅３mという制約の中での調査であったため、住居址全体を調査できたものは皆無であった。

検出された住居址を形態別にみると、SH-1208、SH-1213、SH-1215、SH-1222、SH-1227、SH-1236、SH-1237などの円形住居址とSH-1202、SH-1203、SH-1204、SH-1205、SH-1206、SH-1209、SH-1211、SH-1223、SH-1224、SH-1226、SH-1233、SH-1240、SH-1243、SH-1245などの方形住居址、SH-1228、SH-1230、SH-1235などの同張り隅丸方形住居址、SH-1217、SH-1218、SH-1221、SH-1234などの一辺が３m程度の小型の隅丸方形住居址（土壙かとも考えられるが、今回は住居址をとして取り扱った）などに分類できる。

また、住居の特徴や出土遺物などから住居址の時期についてみると、前述の円形住居址の一群及びSH-1209、SH-1217、SH-1221、SH-1223、SH-1226、SH-1227、SH-1230、SH-1233、SH-1234などは中期、SH-1203、SH-1204、SH-1206、SH-1211、SH-1243及びベッド状遺構をもつSH-1234、SH-1235などが後期の所産であると考えられる。

以下、検出された各住居址について、検出状況や推定できる範囲で法量などを記して報告としたい。

SH-1201（Fig. 5 ・PL. 2）

SH-1201は、調査対象地区北端の推進工作業縦抗部分の調査で検出された遺構で、住居の北壁部分と考えられる壁の立ち上がりが、延長1.2m程確認され、竪穴式住居址として取り扱った。壁のラインが直線的であることから方形住居址の一部と推定される。SH-1202に切られており規模は不明。床面積は、検出された部分で0.2m²。床面までの掘り込みの深さは25cm強。検出された北壁のラインを基準にすると、推定主軸はN－85°－W。

SH-1202（Fig. 5 ・PL. 2）

SH-1202は、推進工作業縦抗部分の調査区５mp付近で住居の中央部が検出された竪穴式住居址である。住居の北壁が延長2.2m程確認されたが、南壁は後世の攪乱のため確認できなかった。方形住居址と考えられるが全体規模は不明。床面積は、検出された部分で10.8m²。床面までの掘り込みの深さは30cm程度。検出された北壁のラインを基準にすると、推定主軸はN-70°-E。

SH-1203（Fig. 5 ・PL. 2）

SH-1203は、推進工作業縦抗部分の調査区10mp付近で住居の北西のコーナーが検出された竪穴式住居址である。方形住居址で、南西部分をSH-1206に切られている。規模は不明。床面積は、検出された部分で2.3m²。床面までの掘り込みの深さは５cm程度。検出された西壁のラインを基準にすると、推定主軸は、N－15°－W程度。

SH-1204（Fig. 5 ・PL. 3）

SH-1204は、推進工作業縦抗部分の調査区南端及び埋設工区部分の調査区北端の10mp付近で住居の北隅及び南西部の床面が検出された隅丸方形と考えられる竪穴式住居址。住居の南部は削平されており、規模は不明。床面積は、検出された部分で4.6m²。床面までの掘り込みの深さは、住居の北隅付近で10cm弱。主軸は、検出された部分を基準とすると、N－45°－W程度。

SH-1205（Fig. 5）

SH-1205は、推進工作業縦抗部分の調査区10mp付近で住居の北東のコーナーが検出された方形の竪穴式住居址である。規模は不明。床面積は、検出された部分で0.3m²。床面までの掘り込みの深さは5cm程度。検出された部分の東壁のラインを基準にすると、推定主軸は、N－20°－W程度。

SH-1206（Fig. 5・PL. 3）

SH-1206は、SH-1204の張り床下部で検出された方形の竪穴式住居址で、南西隅及び西壁の一部が延長3.4m検出された竪穴式住居址。床面積は、検出された部分で約11.0m²。床面までの掘り込みの深さは10cm弱。西壁を基準にすると、推定主軸は、N-15°-W程度。SH-1204に切られている。

SH-1208（Fig. 5・PL. 3）

SH-1208は、15～20mp付近で、調査区内に住居の西側部分1/4程が円弧状に検出された円形の竪穴式住居址。推定規模は径約7m程度、主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で12.0m²。床面までの掘り込みの深さは15cm弱。SH-1206及びSH-1209に切られている。

SH-1209（Fig. 5・PL. 4）

SH-1209は、20mp付近で、調査区の西境界沿いに住居の東側部分1/2程が検出された隅丸方形の竪穴式住居址。南北長は5.0m、床面中央に直径約0.8m、深さ20cm程度の円形の掘り込みをもつ。この土壙が住居の中心に設けられた炉状土壙と仮定すると住居の東西長は約4mと推定される。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で8.8m²。床面までの掘り込みの深さは20cm。プランから推定される主軸は、N－10°－W程度。

SH-1211（Fig. 5・PL. 4）

SH-1211は、45～50mp付近で、調査区の東境界沿いに住居の西壁部分が延長4.6m、幅0.9mにわたって検出された隅丸方形の竪穴式住居址。南側の円形住居址SH-1213を切っているが壁の立ち上がりを確認できなかった。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で3.1m²。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。検出された部分から推定される主軸は、N－20°－W程度。

SH-1213（Fig. 6・PL. 4）

SH-1213は、50～55mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。調査区内で住居の中央やや東側部分が検出された。推定規模は径約8.5m。壁の内側約1mのところに柱穴と考えられるピットが円弧状に並んでいるが主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で18.2m²。床面までの掘り込みの深さは25cm程度。SH-1211に切られている。

SH-1215（Fig. 6・PL. 5）

SH-1215は、60mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。住居の中央やや西側部分が検出された。推定規模は径約7.5m。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で14.0m²。床面までの掘り込みの深さは30cm強。SH-1213と一部接しているものの切り合い関係は不明。

SH-1217（Fig. 6・PL. 5）

SH-1217は、65mp付近で検出された胴張り隅丸方形の小型の竪穴式住居址。住居の西側部分が1/2程度検出された。推定規模は南西壁から一辺2.5m程。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で2.2m²。床面までの掘り込みの深さは5cm強。検出された部分から推定される主軸は、N－40°－E程度。

SH-1218（Fig. 6・PL. 5）

SH-1218は、70mp付近で検出された一辺が約2.2m程の不整方形の小型の竪穴式住居址。住居の西側部分が1/

2程度検出された。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で2.2m²。床面までの掘り込みの深さは10cm強。検出された部分から推定される主軸は、N－50°－E程度。

SH-1221（Fig. 6・PL. 6）

SH-1221は、75mp付近で検出された一辺が約2.5m程の隅丸方形の小型の竪穴式住居址。住居の西側部分が2/3程度検出された。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で3.2m²。床面までの掘り込みの深さは30cm弱。検出された部分から推定される主軸は、N－70°－E程度。

SH-1222（Fig. 6・PL. 6）

SH-1222は、80mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。調査区内で住居の中央やや東側部分が検出された。推定規模は径約8m。壁の内側約1.5mのところに柱穴と考えられるピットが円弧状に並んでいるが主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で13.8m²。床面までの掘り込みの深さは10cm強。

SH-1223（Fig. 6・PL. 6）

SH-1223は、85～90mp付近で検出された方形の竪穴式住居址。住居の東側部分が1/3程度検出された。規模は南北長は4.9m、東西長は検出部分で約3m程。主柱穴は不明。壁周溝がめぐっている。床面積は、検出された部分で8.8m²。床面までの掘り込みの深さは住居の北側で25cm強。検出された部分から推定される主軸は、ほぼ東西を軸としている。

SH-1224（Fig. 7・PL. 7）

SH-1224は、90mp付近で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。住居の東側部分が1/3程度検出された。規模は南北長推定で3.6m、東西長は検出部分で約3m程。主柱穴は不明。後世の削平によって壁の立ち上がりはほとんど失われており、幅広の壁周溝によりプランが確認された。床面積は、検出された部分で7.0m²。床面までの掘り込みの深さは住居中央で5cm程度。東壁を基準とすると主軸は、N－15°－E程度。

SH-1226（Fig. 7・PL. 7）

SH-1226は、95mp付近で検出された方形の竪穴式住居址。住居の南壁及び床面中央部分が検出された。住居の北辺部分は、SH-1224と重複しており規模は不明。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で13.5m²。床面までの掘り込みの深さは住居中央で5cm程度。南壁を基準とすると主軸は、N－80°－E程度。

SH-1227（Fig. 7・PL. 7）

SH-1227は、110mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。調査区内で住居の西側部分が1/5程度検出された。推定規模は径約6m。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で2.2m²。床面までの掘り込みの深さは20cm強。

SH-1228（Fig. 7・PL. 8）

SH-1228は、115～120mp付近で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。住居の北東壁、東隅、南東壁部分など東側部分が1/3程度検出された。規模は南北長推定で4m程度、東西長は検出部分で約3m弱。主柱穴は不明。調査区西界部分の床面に二段掘りの土壙をもつ。床面積は、検出された部分で14.8m²。床面までの掘り込みの深さは住居中央で15cm程度。東壁を基準とすると主軸は、N－15°－E程度。

SH-1230（Fig. 7・PL. 8）

SH-1230は、120～125mp付近で検出された胴張りの隅丸方形と考えられる竪穴式住居址。調査区内で住居の西側部分が1/5程度検出された。住居の西隅部分が検出されているのみで規模は不明。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で7.7m²。床面までの掘り込みの深さは10cm程度。検出された部分から推定される主軸は、N－

45°－E程度。

SH-1233（Fig. 7 ・PL. 8）

SH-1233は、135mp付近で検出された方形の竪穴式住居址。調査区内で住居の西側部分が検出された。住居の西隅部分が検出されているのみで規模は不明。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で5.3m²。床面までの掘り込みの深さは15cm程度。西壁を基準とすると主軸は、N－45°－W程度。

SH-1234（Fig. 7 ・PL. 9）

SH-1234は、135～140mp付近で検出された方形の小型の竪穴式住居址。調査区内で住居の東側部分が2/3程度検出された。住居の南部分はSH-1235に切られているものの、推定規模は、長辺約3.6m、短辺約2.6m。主柱穴は不明。住居北壁に沿って幅１m程、高さ10cm程度のベッド状遺構をもつ。床面積は、推定で7.4m² 程度。床面までの掘り込みの深さは45cm程度。長軸を基準とすると主軸は、N－45°－W程度。

SH-1235（Fig. 8 ・PL. 9）

SH-1235は、140～145mp付近で検出された隅丸方形の竪穴式住居址。調査区内で住居の西側部分が1/3程度検出された。規模は、確認できる南北長が5.7m、東西長は検出された部分で約2.2m。主柱穴は不明。住居北西隅及び南西隅にそれぞれ1.8m×1.1m、高さ10cm程度、1.8m×0.8m、高さ10cm程度の長方形のベッド状遺構をもつ。床面積は、検出された部分で10.4m²。床面までの掘り込みの深さは30cm程度。西壁を基準とすると主軸は、N－15°－W程度。

SH-1236（Fig. 8 ・PL. 9）

SH-1236は、145mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。調査区内で住居の西側部分が1/4程度検出された。推定規模は径６m弱程度。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で6.8m²。床面までの掘り込みの深さは15cm強。

SH-1237（Fig. 8 ・PL. 9）

SH-1237は、145mp付近で検出された円形の竪穴式住居址。調査区内で住居の東側部分が一部検出された。推定規模は径６m弱程度。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で1.3m²。床面までの掘り込みの深さは10cm程度。

SH-1240（Fig. 8 ・PL.10）

SH-1240は、155mp付近で検出された方形と考えられる竪穴式住居址。調査区内で住居の中央部分が検出された。規模は、確認できる南北長が3.5m、東西長は検出された部分で約2.6m。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙をもつ。床面積は、検出された部分で8.5m²。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。検出された北西壁、南東壁を基準とすると主軸は、N－40°－E程度。

SH-1243（Fig. 8 ・PL.10）

SH-1243は、160～165mp付近で検出された方形と考えられる竪穴式住居址。調査区内で住居の中央部分が検出された。規模は、確認できる南北長が4.8m、東西長は検出された部分で約2.3m。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で9.8m²。床面までの掘り込みの深さは20cm弱。検出された北壁、南壁を基準とすると主軸は、N－75°－E程度。

SH-1245（Fig. 8）

SH-1245は、167mp付近で検出された方形と考えられる竪穴式住居址。調査区内で住居の西隅が検出された。規模は、確認長で南北長が1.0m、東西長は0.8m。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で0.4m²。床面ま

での掘り込みの深さは10cm弱。検出された部分から推定される主軸は、N－30°－E程度。

SH-1246（Fig. 8・PL.10）

SH-1246は、170～175pm付近で検出された方形と考えられる竪穴式住居址。今回の調査区の南限で検出された住居址で、住居の南半部は、船石遺跡と船石南遺跡を分かつ小支谷となっており、遺構とともに地山も失われている。調査区内で住居の北壁及び床面の一部が検出された。規模は、確認できる部分で東西長は3.2m程、南北長は不明。住居は二段掘りになっており、壁際に幅0.4m、高さ20cmほどの段がめぐっている。主柱穴は不明。床面積は、検出された部分で6.3m²。床面までの掘り込みの深さは20cm程度。検出された部分から推定される主軸は、ほぼ南北を軸としている。

Tab. 1　船石南遺跡７区　出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模（m・m²）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-1201	方形？	※1.2	※0.5	0.27	※0.2	(N-85°-W)						SH-1202に切られる。
SH-1202	方形	※4.5	※2.5	0.14	※10.8	(N-70°-E)					弥生式土器甕	
SH-1203	方形	※1.8	※1.3	0.05	※2.3	(N-15°-E)					弥生式土器甕、鉢	
SH-1204	隅丸方形	※3.4	(3.4)	0.09	※4.6	(N-45°-W)					弥生式土器甕、壷、器台、甑、ミニチュア、石斧	
SH-1205	方形	※1.1	※0.8	0.05	※0.3	(N-20°-W)						
SH-1206	方形？	※3.2	※1.4	0.9	※11.0	(N-15°-W)						
SH-1208	円形	(7.0)		0.14	※12.0	—					弥生式土器甕、壺、	
SH-1209	隅丸方形	5.0	※2.2	0.20	※8.8	(N-10°-W)			炉状土壙		弥生式土器甕、壷、高坏、器台、石包丁、土製円盤	
SH-1211	隅丸方形	※4.6	※0.9	0.20	※3.1	(N-20°-W)						
SH-1213	円形	(8.5)		0.26	※18.2	—						SH-1211に切られる。
SH-1215	円形	(7.5)		0.33	※14.0	—					弥生式土器甕、砥石	
SH-1217	隅丸方形	※2.1	※2.2	0.06	※2.2	(N-40°-E)					弥生式土器甕	
SH-1218	不整方形	※1.5	(2.2)	0.12	※2.2	(N-50°-E)					弥生式土器器台	
SH-1221	隅丸方形	(2.5)	※1.8	0.28	※3.2	(N-70°-E)					弥生式土器甕、壺、	
SH-1222	円形	(8.0)		0.12	※13.8	—					弥生式土器甕、壺、	
SH-1223	方形	4.9	※3.0	0.26	—	(N-90°-E)		有			弥生式土器甕、砥石	
SH-1224	隅丸方形	(3.6)	※3.0	0.06	※7.0	(N-15°-E)		有				
SH-1226	方形	※6.2	※2.2	0.04	※13.5	(N-80°-E)					弥生式土器甕、ミニチュア	
SH-1227	円形	(6.0)		0.22	※2.2	—					弥生式土器甕、高坏、器台、土弾、石鏃	
SH-1228	隅丸方形	※2.6	※2.6	0.05	※4.8	(N-15°-E)					弥生式土器壺	
SH-1230	隅丸方形	4.1	2.1	0.10	※7.7	(N-45°-E)					弥生式土器甕、壺、	
SH-1233	方形	4.3	1.5	0.16	※5.3	(N-45°-W)					弥生式土器甕、ミニチュア、鉢	
SH-1234	方形	(3.6)	(2.6)	0.47	(7.4)	(N-45°-W)				ベッド状遺構１ヶ所	弥生式土器甕、壷、器台	SH-1235に切られる。
SH-1235	隅丸方形	5.7	※2.2	0.31	※10.4	(N-15°-W)				ベッド状遺構２ヶ所	弥生式土器甕、壷、鉢、碗、器台、ミニチュア	
SH-1236	円形	(6.0)		0.16	※6.8	—					弥生式土器甕、鉢、器台	
SH-1237	円形	(6.0)		0.10	※1.3	—						
SH-1240	方形	3.5	2.6	0.20	※8.5	(N-40°-E)			炉状土壙		弥生式土器甕、壺、	
SH-1243	方形	4.8	2.3	0.19	※9.8	(N-75°-E)					弥生式土器甕、壷、鉢、高坏、器台、支脚	
SH-1245	方形	1.0	0.8	0.08	※0.4	(N-30°-E)						
SH-1246	隅丸方形	4.0	3.2	0.21	※6.3	(N-0°-E)				壁際に段がめぐる。	弥生式土器甕、壷、鉢、ミニチュア	

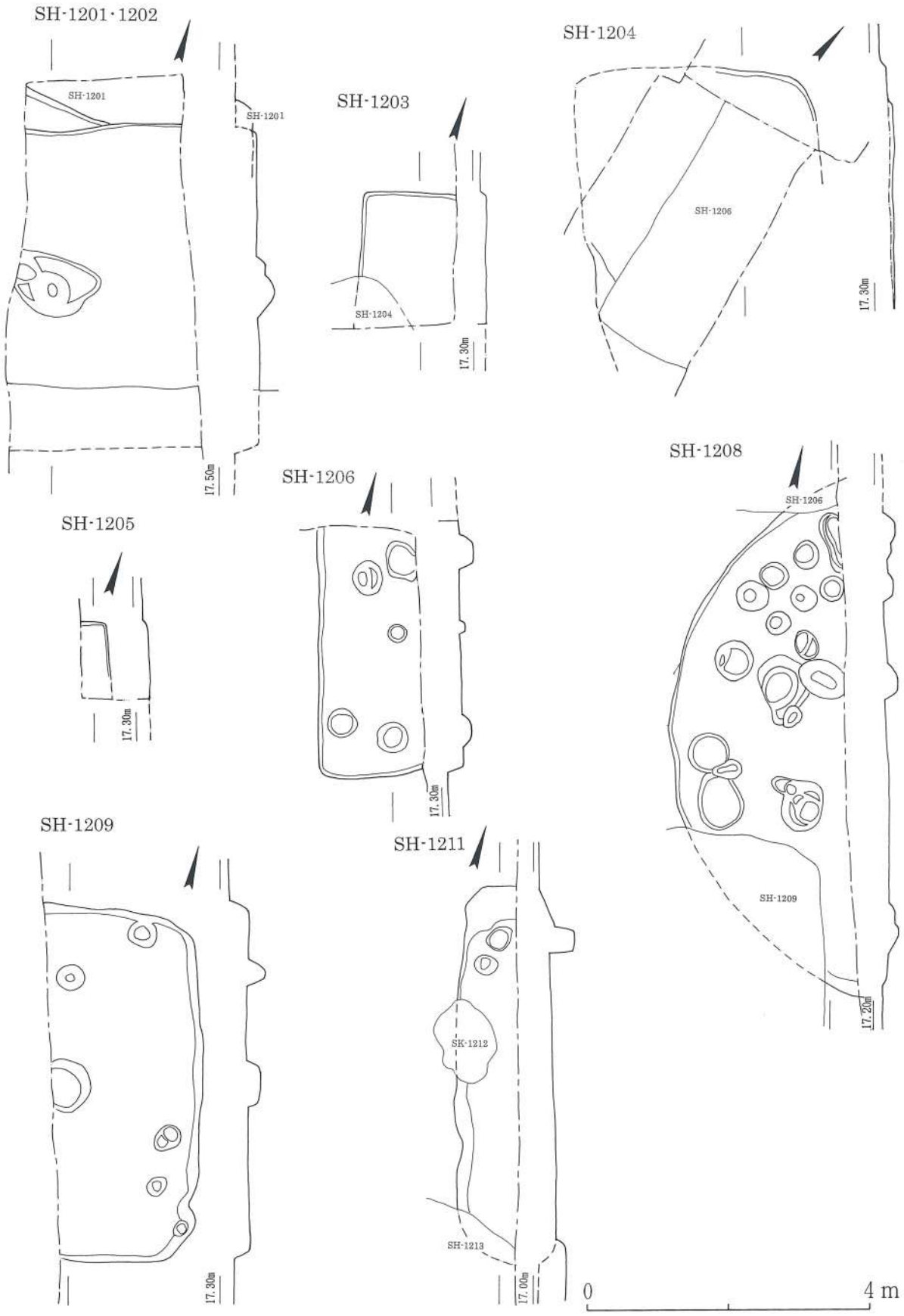


Fig. 5　船石遺跡12区　竪穴式住居址実測図（1）
SH-1201～SH-1206・SH-1208・SH-1209・SH-1211（1/80）

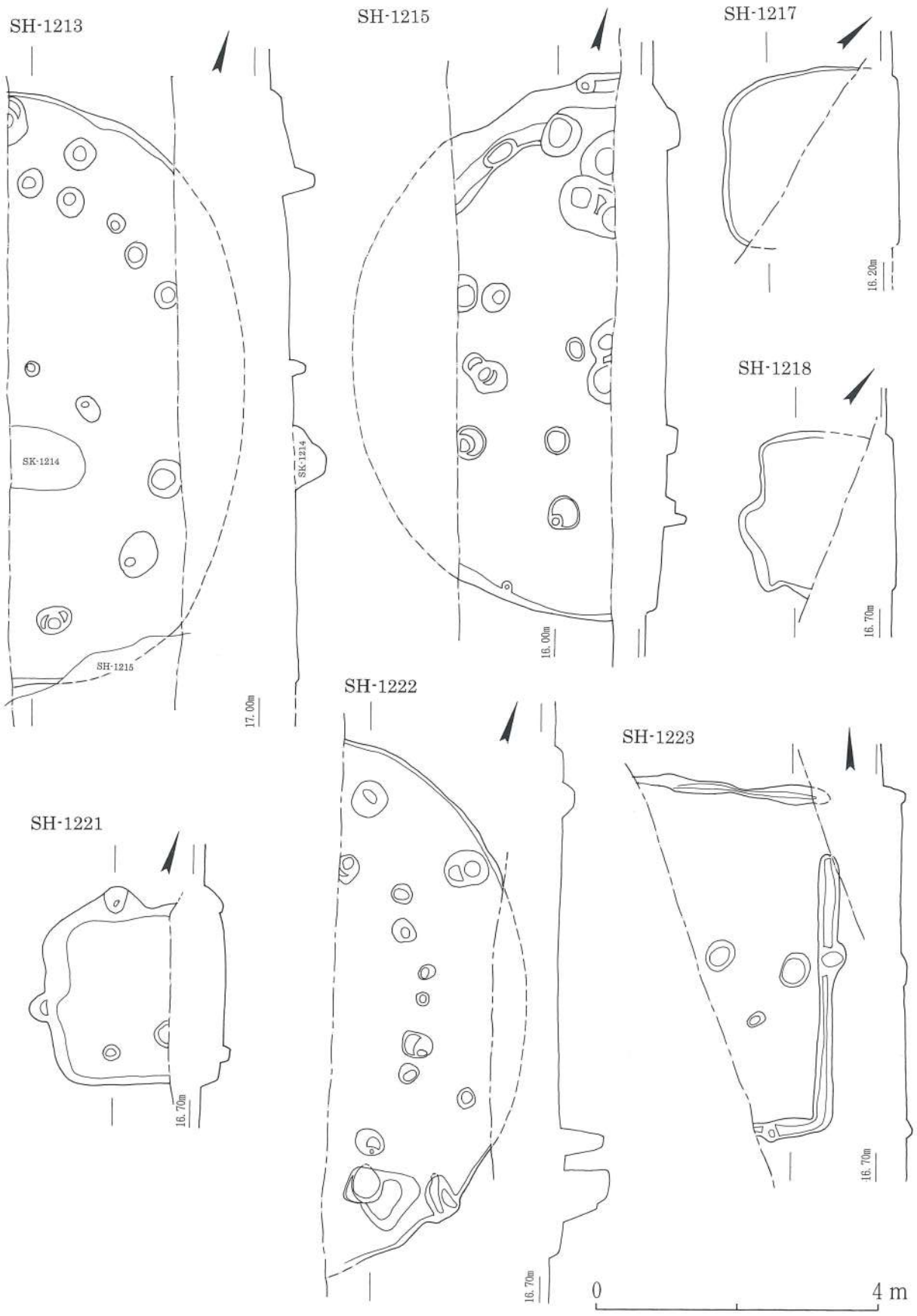


Fig. 6　船石遺跡12区　竪穴式住居址実測図（2）
SH-1213・SH-1215・SH-1217・SH-1218・SH-1221～SH-1223（1/80）

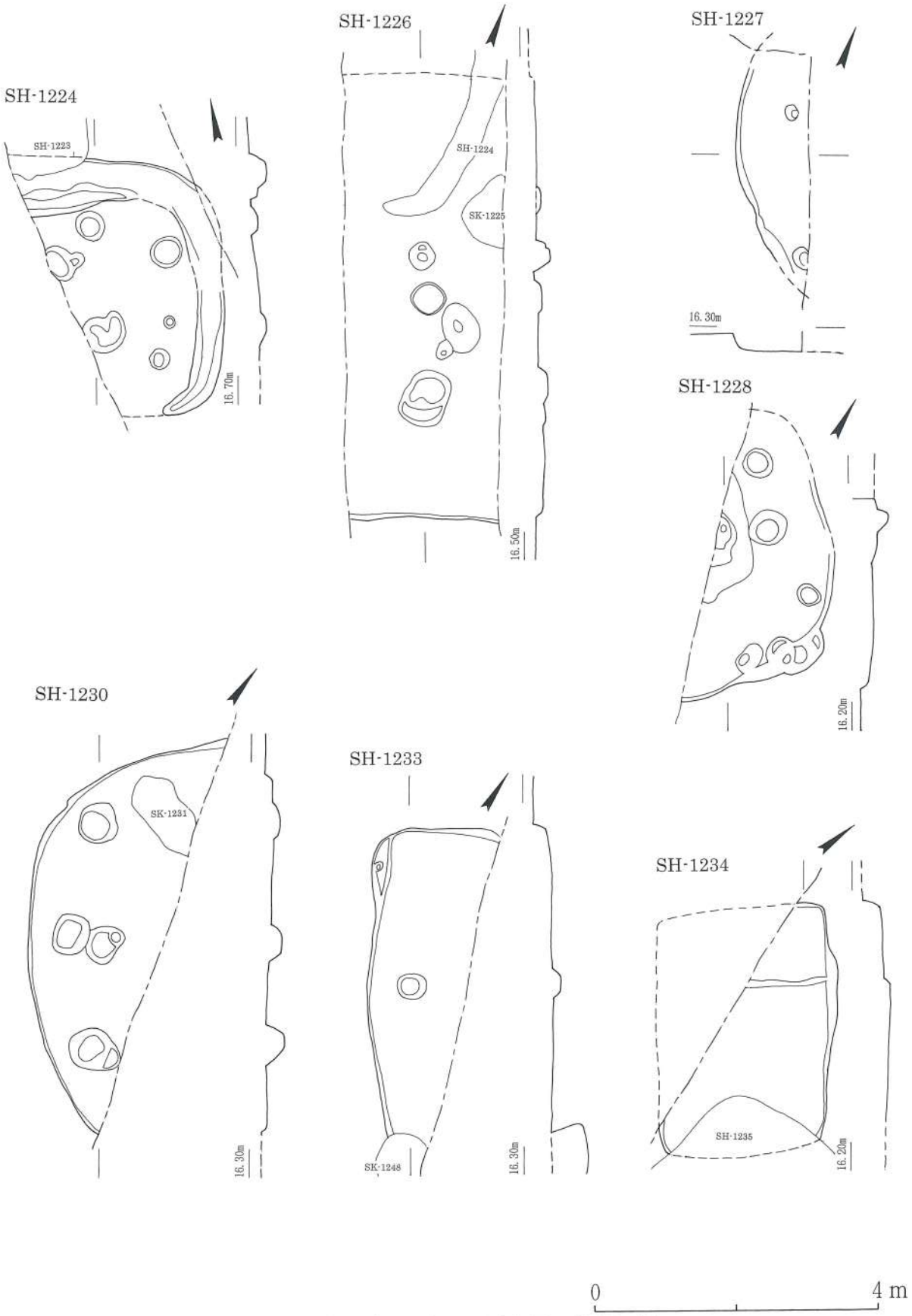


Fig. 7　船石遺跡12区　竪穴式住居址実測図（3）
SH-1224・SH-1226～SH-1228・SH-1230・SH-1233・SH-1234（1/80）

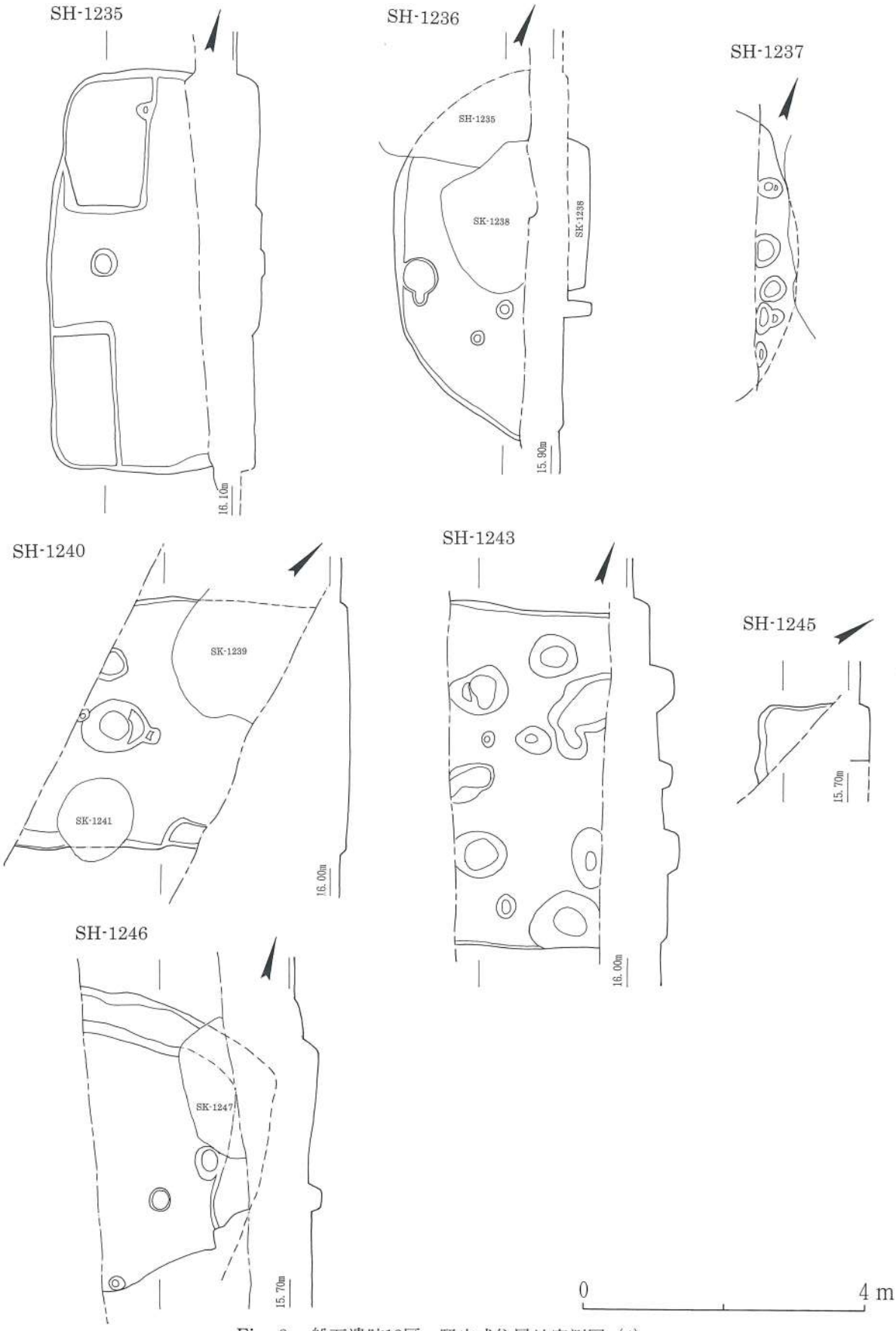


Fig. 8　船石遺跡12区　竪穴式住居址実測図（4）
SH-1235～SH-1237・SH-1240・SH-1243・SH-1245・SH-1246（1/80）

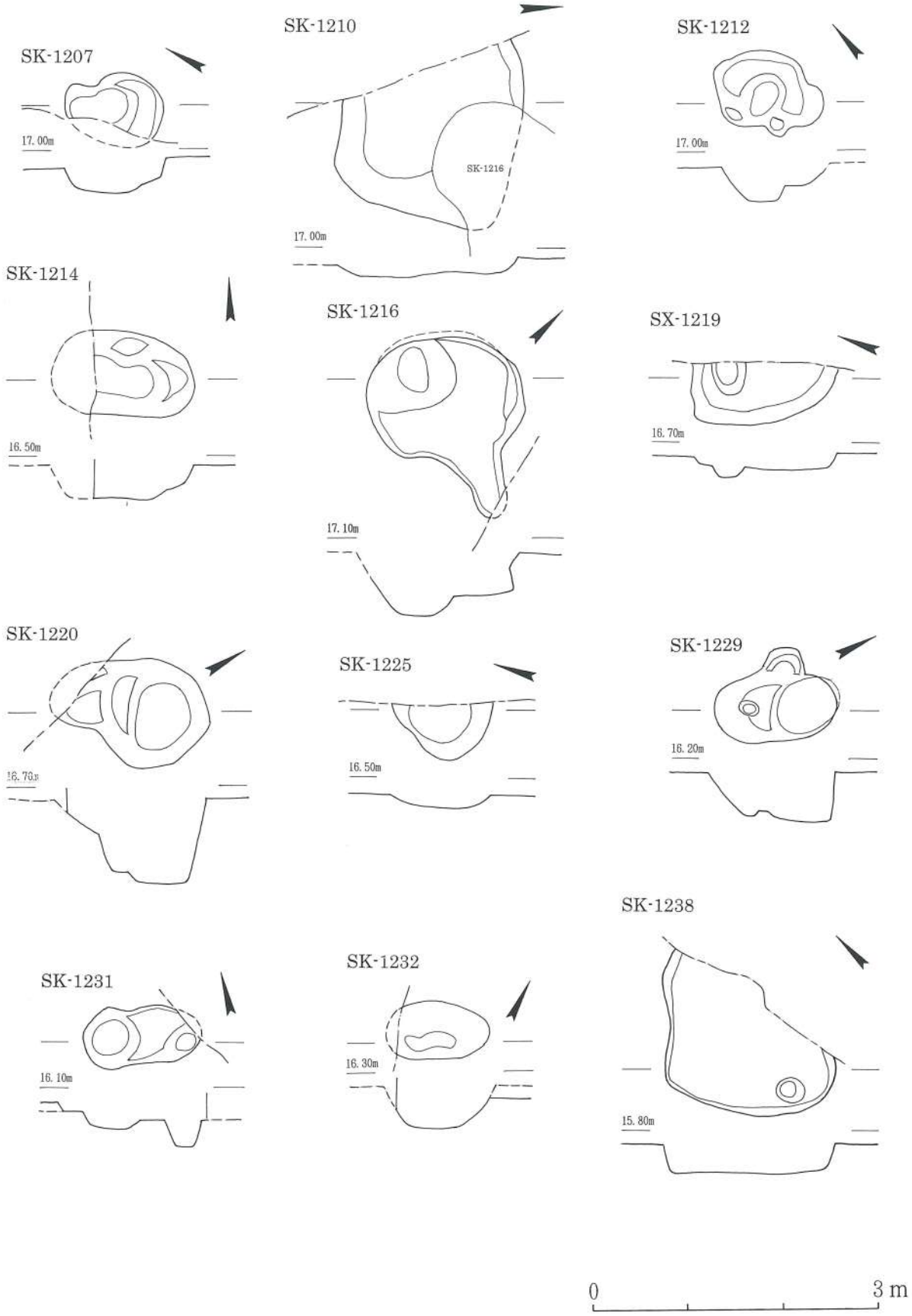


Fig. 9　船石遺跡12区　土壙実測図（1）SK-1207・SK-1210・SK-1212・SK-1214・SK-1216・SX-1219・SK-1220・SK-1225・SK-1229・SK-1231・SK-1232・SK-1238（1/60）

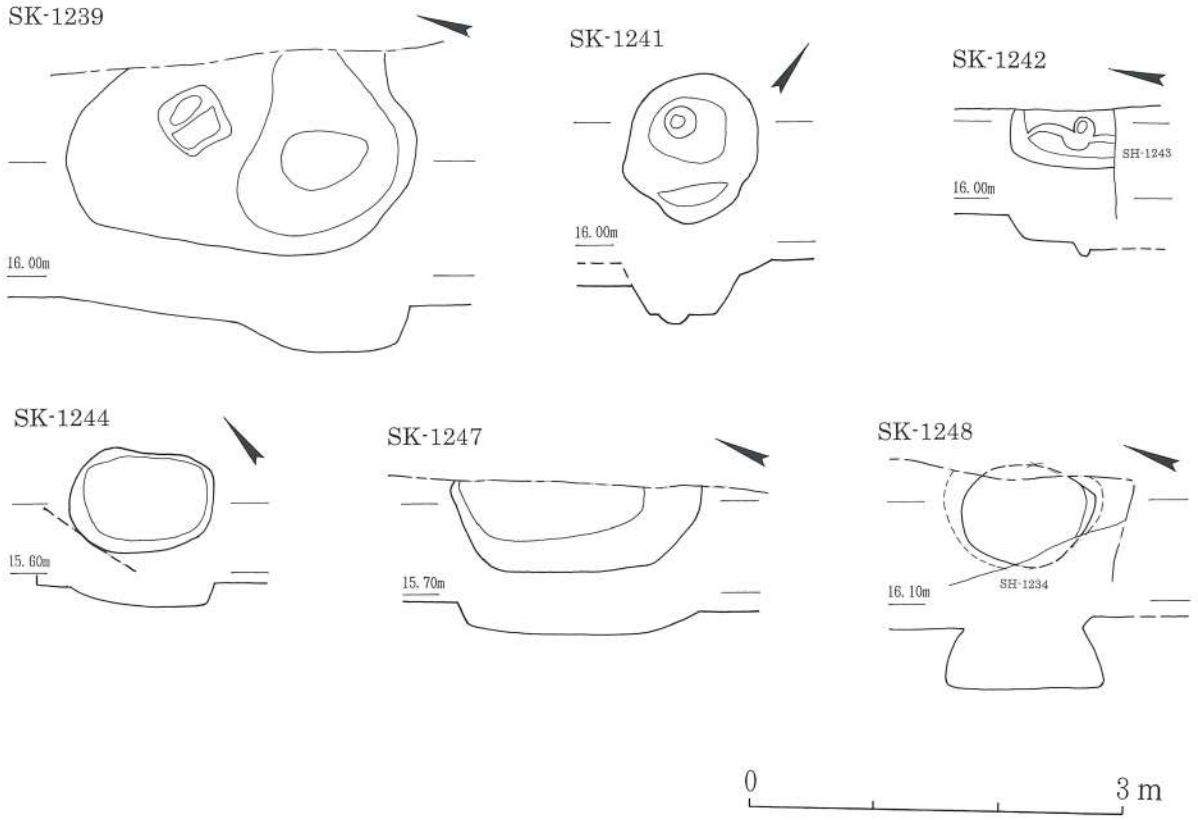


Fig.10　船石遺跡12区　土壙実測図（2）
SK-1239・SK-1241・SK-1242・SK-1244・SK-1247・SK-1248（1/60）

土　壙（Fig. 9、10・PL.11、12・Tab. 2）

今回の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は18基であった。この中で、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、SK-1210、SK-1212、SK-1216、SK-1220、SK-1231、SK-1232などが弥生時代中期の所産であると考えられる。以下、各土壙について形態、法量などを一覧表にまとめて報告に代える。

Tab. 2　船石南遺跡12区　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-1207	不整形	1.03 0.90	※0.6 ※0.5	0.32	※0.4			
SK-1210	不整方形	※2.0 ※1.2	1.90 1.56	0.18	※1.4		弥生式土器甕、土弾	
SK-1212	不整形	1.05 0.75	0.80 0.56	0.19	0.3		弥生式土器甕、壷、鉢、土製勾玉	
SK-1214	長楕円形	1.05 0.62	0.87 0.60	0.36	0.5			
SK-1216	不整円形	1.66 1.50	1.28 1.28	0.44	1.6		弥生式土器甕、壷、鉢	一部が袋状に膨らむ
SX-1219	不整形	1.50 1.24	※0.6 ※0.5	0.10	※0.5			
SK-1220	不整形	※1.6 ※1.3	1.10 0.70	0.86	0.7		弥生式土器甕、壷	
SK-1225	不整円形？	1.04 0.66	※0.6 ※0.4	0.11	※0.2			
SK-1229	不整楕円形	1.30 1.02	0.98 0.82	0.50	0.4			

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-1231	不整形	※1.2 ※1.0	0.62 0.44	0.07	0.4		弥生式土器甕	
SK-1232	楕円形	※1.0 0.57	0.62 0.16	0.42	0.1		弥生式土器甕、壷	
SK-1238	不整方形	※1.8 1.7	1.74 1.60	0.27	※1.8			
SK-1239	不整形	2.80 0.72	※1.6 0.44	0.34	※1.4			
SK-1241	不整円形	1.18 0.82	1.03 0.62	0.31	0.4	浅いピット		
SK-1242	方形？	※0.9 ※0.7	※0.4 ※0.3	0.24	※0.2			
SK-1244	楕円形	1.12 0.98	0.82 0.66	0.23	0.5			
SK-1247	楕円形？	2.00 1.50	※0.7 ※0.4	0.23	※0.6			
SK-1248	円形	1.10 1.27	※0.6 ※0.7	0.50	0.9			袋状土壙

(2) 遺　物（Fig.11～17・PL.12～16）

今回の調査で各遺構から出土した遺物は、ほとんどが弥生時代の土器、土製品、石器などであった。ここでは、出土した遺物のうち土器類については代表的なものを遺構ごとに報告し、その他の土製品、石器類は、器種ごとに報告したい。

SH-1202出土土器（Fig.11・PL.12）

1、2は、弥生式土器の甕。1は、胴部上位が丸味をもち頸部はくびれ、口縁は短くやや外反しながら大きく開く。胴部内外面及び口縁内面にハケ目。2は、逆「L」字形口縁の甕。

SH-1203出土土器（Fig.11）

3、4は、弥生式土器。2はやや大振りの碗。小さな平底の底部に内湾しながら開く体部が付く。内面ハケ目、外面ナデ。4は長胴甕の口縁部。頸部が「く」の字形にくびれ、口縁は直線的にやや開く。内外面ともにハケ目。

SH-1204出土土器（Fig.11、12・PL.12、13）

5～20は、弥生式土器。5～7は、器台。5は裾部が直線的に広がり円錐台形を呈し、受け部はやや外反しながら大きく開く。受け部内面及び外面はハケ目、裾部内部はナデ、くびれ部内面には指頭によるナデつけ痕が残る。6は円錐台形の裾部に袋状に内湾した受け部が付く。裾部外面はハケ目、他の部位はナデ。7は裾部が外反しながらやや開き、受け部は内側へ折り曲げられ径2cm程の孔が焼成前に穿孔されている。裾部外面はハケ目、他の部位はナデ。8～13は頸部が「く」の字形にくびれ、口縁が開く甕。8、9は張りが強く球形に近い胴部をもち、口縁はやや外反しながら短く開く。内外面ともにハケ目。10～13は長胴甕。10は口縁が直線的にやや開く。11は口縁端部がやや内湾している。12は口縁が朝顔状に大きく開く。13は口縁がやや外反しながら短く開く。いずれも内外面ともにハケ目。14は甑。平底の底部中央に径2.5cm程の孔が焼成前に穿孔されている。外面ナデ、内面ハケ目。15は甕などの底部で「ハ」の字型に開く台が付く。台の内面にハケ目を残す。16は小型壷。小型丸底壷の底部に丸底気味のベタ底をつけたような形態を呈す。球形の体部に直線的にやや開く口縁部が付く。内外面ともにナデ。17は手捏ねの小型土器。18は高坏？丸味を帯びた深めの体部に、中空の脚が付く。内外面ともにナデ。19、20は壷。頸部と胴部の境界に断面三角形の凸帯が1条めぐる。いずれも内外面にハケ目を残す。

SH-1208出土土器（Fig.12）

21～23は、弥生式土器。21、23は壷。壷。内外面ともにナデ。23は口縁が外反しながら開く。内外面ともにナデ。22は逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。

SH-1209出土土器（Fig.12・PL.13）

24～35は、弥生式土器。24～30は甕。24は頸部が「く」の字形にくびれ、口縁が大きく開く。内外面ともにハケ目。25～29は胴部上位がやや内傾する逆「L」字形口縁の甕。25、26は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。27は内外面ともにナデ。28、29はいずれも内面ナデ、外面ハケ目。30は胴部が球形に近い小型の甕。頸部が「く」の字形にくびれ、短い口縁が開く。内外面ともにハケ目。31、32は壷。31は口縁が外反しながら開く。内外面ともにナデ。32は袋状口縁の壷。遺存部は内外面ともにナデ。33、34は高坏。33は脚裾部。内外面ともにナデ。内面一部にハケ目を残す。34はやや垂れ下がり気味の鋤形口縁の坏部。内面ナデ、外面ハケ目。35は器台又は支脚。体部は円筒形を呈し、裾部が「ハ」の字型に開く。内面裾部及び外面ハケ目。

SK-1210出土土器（Fig.13）

36～38は、弥生式土器。いずれも逆「L」字形口縁の甕。遺存部は内外面ともにナデ。

SK-1212出土土器（Fig.13・PL.13、14）

40～47は、弥生式土器。40～42は胴部上位がやや内傾する甕で口縁は断面三角形を呈し、口縁下部に凸帯が1条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。44は胴部上位がやや内傾する逆「L」字形口縁の甕。内外面ともにナデ。43は鉢。内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁直下に沈線状の溝がめぐる。内面ナデ、外面ハケ目。45、46は甕の底部。45は上底気味の底部が大きく張り出す。46は台付きの底部。47は小型の広口壷。球形の体部に外反する短い口縁が付く。内外面ともにナデ。口縁部外面に指頭圧痕を残す。

SH-1215出土土器（Fig.13）

49は、弥生式土器。胴部上位がやや内傾する甕で口縁は断面三角形を呈し、口縁下部にの凸帯が1条めぐる。いずれも内外面ともにナデ。

SK-1216出土土器（Fig.13、14・PL.14）

51～60は、弥生式土器。51、52は外反しながら開く壷の口縁部。いずれも内外面ともにナデ。53～58はいずれも逆「L」字形口縁の甕。53は口縁内部が鋭く張り出す。内外面ともにナデ。54は内面ナデ、外面ハケ目。55は胴部上位が張りをもつものと考えられ、頸部が鋭くくびれ、口縁がやや外反しながら横に開く。口縁端部にヘラ上工具の先端を連続して押圧した刻み目をもつ。56は内外面ともにナデ。57胴部上位が張りをもち頸部がくびれ口縁はやや上方へむかって短く開く。内外面ともにナデ。58は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。内面ナデ、外面ハケ目。60は器台あるいは支脚。中空で側面観は凹レンズ形を呈す。体部中位がくびれ、裾部、受け部がやや外反し開く。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-1217出土土器（Fig.14）

61、62は、弥生式土器。胴部上位がやや内傾する甕で、口縁は断面三角形を呈す。61は内外面ともにナデ、62は内面ナデ、外面ハケ目。

SH-1218出土土器（Fig.14）

63は、弥生式土器。器台あるいは支脚の脚部裾と考えられる。内外面ともにナデ。

SH-1220出土土器（Fig.14）

64、65は、弥生式土器。64は口縁が朝顔状に外反しながら開く壷。内外面ともにナデ。65は口縁が断面三角形を呈す甕。内外面ともにナデ。

SH-1221出土土器（Fig.14・PL.14）

66～72は、弥生式土器。66は逆「L」字形口縁の甕。口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。内外面ともにナデ。67～69は口縁が断面三角形を呈す甕。67は胴部上位がやや内傾する。内外面ともにナデ。68は内面ナデ、外面ハケ目。69は内外面ともにナデ。70は高坏の坏部。浅い体部が直線的に開き口縁が小さく内側に張り出す。口縁上部は平面をもち、ハケ目が施されている。体部は内面ハケ目、外面ナデ。71、72は口縁が朝顔状に外反しながら開く壷。いずれも内外面ともにナデ。

SH-1222出土土器（Fig.14）

73、74は、弥生式土器。73は小型の甕。胴部はやや張りがあり、頸部が「く」の字形のくびれ短く開く口縁が付く。内面ナデ、外面ハケ目。74は壷。頸部と肩部の境界に断面三角形の凸帯が１条めぐる。内面ナデ、外面にはハケ目を残す。

SH-1223出土土器（Fig.14）

75、76は、弥生式土器。75は逆「L」字形口縁の甕。口縁が内側に大きく張り出している。内外面ともにナデ。76は小型の甕。胴部はやや張りがあり、頸部が「く」の字形のくびれ短く開く口縁が付く。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-1226出土土器（Fig.15）

77～79は、弥生式土器。77はやや小振りの碗。口縁端部が細くつままれている。内外面ともにナデ。78は小型の甕。張りの弱い胴部に直線的な口縁が外傾し開く。内外面ともにナデ。79は「L」字形口縁の甕。口縁が内側に小さく張り出している。内外面ともにナデ。

SH-1227出土土器（Fig.15・PL.14）

80～85、87、88は、弥生式土器。80～85は甕。80、82、83、85は逆「L」字形口縁の甕。81、84は口縁が断面三角形を呈す甕。81、82、84は内外面ともにナデ。81、83は内面ナデ、外面ハケ目。85は内外面ともにナデ。口縁端部に爪先を連続して押圧したような刻み目をもつ。87は器台。中空で側面観は凹レンズ形を呈す。体部中位がくびれ、裾部、受け部がやや外反し開く。内面ナデ、外面ハケ目。88は高坏。坏部を欠く。脚部は短い。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-1228出土土器（Fig.15）

89、90は、弥生式土器。89は口縁が朝顔状に外反しながら開く壷。口縁端部が細くつままれている。内外面ともにナデ。90は逆「L」字形口縁の甕。口縁はやや垂れる。内外面ともにナデ。

SH-1229出土土器（Fig.15）

91、92は、弥生式土器で、いずれも逆「L」字形口縁の甕。口縁が内側に小さく張り出す。内外面ともにナデ。

SH-1230出土土器（Fig.15）

93～95は、弥生式土器。93、94はいずれも内傾する胴部に逆「L」字形口縁が付く甕。93は口縁が内側に張り出す。内外面ともにナデ。95は器台の脚裾部。裾端部が内側に小さく折り曲げられている。遺存部は内外面ともにナデ。

SK-1231出土土器（Fig.15）

96は、弥生式土器で甕の底部。底部が「ハ」の字型に広がり、底面はやや上底を呈す。内外面ともにナデ。

SK-1232出土土器（Fig.15）

97～99は、弥生式土器。97、98は胴部上位が内傾し、口縁が断面三角形を呈す甕。いずれも内外面ともにナデ。99は壷の胴部下位。遺存部に断面半円形に近い細い凸帯が2条めぐる。内外面ともにナデ。

SH-1233出土土器（Fig.15、16・PL.14、15）

100～103は弥生式土器。100、101は逆「L」字形口縁の甕。100は内面ナデ、外面ハケ目。101は内外面ともにナデ。102は手捏ねの小型土器。底部は厚く、体部が直線状に開きながら立ち上がる。内外面ともにナデ。103は鉢。平底の底部で体部が内湾しながら立ち上がり口縁にいたる。内外面ともにハケ目。

SH-1234出土土器（Fig. 16・PL.15）

104～108は、弥生式土器。104、105、107は甕。104は逆「L」字形口縁の甕で内外面ともにナデ。105、107は口縁が断面三角形を呈す甕。105は内面ナデ、外面ハケ目。107は内外面ともにナデ。106は口縁が朝顔状に外反しながら開く壷。内外面ともにナデ。108は支脚。上部は失われているが裾部はやや広がり、底面内側に窪みをもつ。内外面ともにナデられているが、外面には粘土をらせん状にひねったことによって生じたような溝が部分的に残っている。

SH-1235出土土器（Fig.16、17・PL.15）

109～126は、弥生式土器。109は小型の甕。頸部が「く」の字形にくびれ、外傾する厚く短い口縁が付く。内面ハケ目、外面ナデ。120は口縁が大きく開く甕。口縁端部は肥厚し、頸部に断面三角形の凸帯がめぐる。遺存部は内外面ともにナデ。111は鉢。半球形の体部を呈し、内面ハケ目、外面ナデ。112壷の肩部。頸部との境界に断面三角形の凸帯が2条めぐり。肩部に直径1.5cmの円形浮文が貼り付けられている。遺存部分が少ないためにこの浮文が何単位施文されていたかは不明。肩部は内外面ともにハケ目。113は甕。胴部上位が内傾し、口縁が斜め上方に小さくつまみ出されている。内面ハケ目、外面ナデ。114は口縁が断面三角形を呈す甕。内外面ともにナデ。115は鋤形口縁の壷。口縁端部にヘラ状工具の先端を連続して押圧した刻み目をもつ。116は無頸の甕。胴部上位は内湾し内傾し、口縁部は内側に小さくつままれている。内外面ともにハケ目。117、118は袋状口縁の壷。いずれも内外面ともにナデ。119は鉢。内湾しながら立ち上がる胴部で頸部が「く」の字形にくびれ、口縁が大きく開く。内外面ともにハケ目。120は「ハ」の字型に開く器台の裾部。内面ハケ目、外面ナデ。121は円錐台形を呈す支脚。中空で上面には直径3.5cm程度の焼成前に穿孔された孔をもつ。内面粗いナデ、外面叩き目。122、123は手捏ねの小型土器。124は小型の甕。張りのない胴部に外傾する短い口縁が付く。内面ナデ、外面ハケ目。125は碗。丸底と思われやや腰は張りをもち口縁は直立する。内外面ともにナデ。126は広口壷。体部は扁平な球形を呈し、小さな口縁がつまみ出されている。内外面ともにナデ。

SH-1236出土土器（Fig.17・PL.15）

127、128は、弥生式土器。127は鉢。平底で半球形の体部に「く」の字形に開く口縁が付く。内面ナデ、外面ハケ目。128は器台。体部上位にくびれ部をもち受け部が外反し大きく広がる。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-12436出土土器（Fig.17・PL.15）

129～132は、弥生式土器。129、132は器台。くびれ部分が厚く、受け部は大きく広がり端部が小さくつままれており、袋状に近い形態を呈す。内外面ともにハケ目。132はくびれ部位が遺存し裾部は直線的に開く。くびれ部内面はナデ、他はハケ目。130は長胴甕。胴部の張りは弱く、頸部は「く」の字形にくびれ、口縁は直線的に

開く。内外面ともにハケ目。131は鉢。丸底で体部は扁平な球形を呈し、頸部は「く」の字形にくびれ、口縁は直線的に開く。

土製品・石製品（Fig.13、15・PL.16）

今回の調査で検出された土製品は、土製勾玉１点、土弾２点、土製円盤１点、また、石製品は、石包丁１点、片刃石斧１点、砥石２点、石鏃１点、掻器２点であった。

土製勾玉（Fig.13-48・PL.16）

48は、勾玉と考えられる土製品。体部はやや湾曲し、頭部端をやや欠く。頭部には焼成前に孔を開けようとしてつけられた窪みが３ヶ所にあるがいずれも貫通はしていない。全長遺存部で5.7cm、最大径2.2cm、重量28.6g。SK-1212出土

土弾（Fig.13-39、15-86・PL.16）

39、86は、土弾。いずれもラグビーボール型を呈す。39は全長4.2cm、最大径2.3cm、重量16.1g。SK-1210出土。86は全長4.5cm、最大径2.3cm、重量20.6g。SH-1227出土。

土製円盤（PL.16）

133は、直径4.7cm程度、厚さ0.9cmの土製円盤。中央部が凸レンズ状にやや厚みを増す。写真上方に焼成前に穿孔された小孔をもつ。ここに紐などを通して下げて使用したものと考えられる。重量20.4g。SH-1209出土

石包丁（PL.16）

134は、外湾刃半月形の大型の石包丁で、全体の1/4程度が遺存しているものと考えられえる。遺存部で長さ8.2cm、幅6.1cm、厚さ0.4cm。泥岩製。SH-1209出土。

片刃石斧（PL.16）

135は、長さ4.2cm、の扁平な片刃石斧。重量22.7g。泥岩製。SH-1204出土。

砥石（Fig.13-50・PL.16）

50、136は、砥石。50は四角柱状の砥石で全長14.0cm、断面は2.0cm×1.6cmの方形を呈す。長軸に沿って４面が使用されている。上端に両面から小孔が穿孔されている。この孔に紐を通し携帯の用に供したものと考えられる。重量75.8g。泥岩製。SH-1215出土。136は本来扁平な長方体に近い形態を呈していたものが、使用によって中央部が細り折れたものと考えられる。長軸に沿って4面が使用されている。遺存部で長さ4.3、幅2.4cm、厚さ0.3cm。重量1.3g。SH-1223出土。

石鏃（PL.16）

137は黒曜石製の凹基式の石族で、先端を一部欠く。両側片の刃部に抉りをもつ。長さ2.2、幅1.8cm、厚さ0.7cm。重量15.3g。泥岩製。SH-1227出土。

掻器（PL.16）

138、139は掻器と考えられる石製品。138は縦長の剥片を利用し、両側片に細かい調整を加え刃部を作り出している。黒曜石製。長さ4.2、幅1.8cm、厚さ0.7cm。重量5.6g。SH-1203出土。139は縦長の剥片を利用し、写真左辺に調整を加え刃部を作り出している。サヌカイト製。長さ5.3、幅2.7cm、厚さ1.0cm。重量11.5g。SH-1202出土。

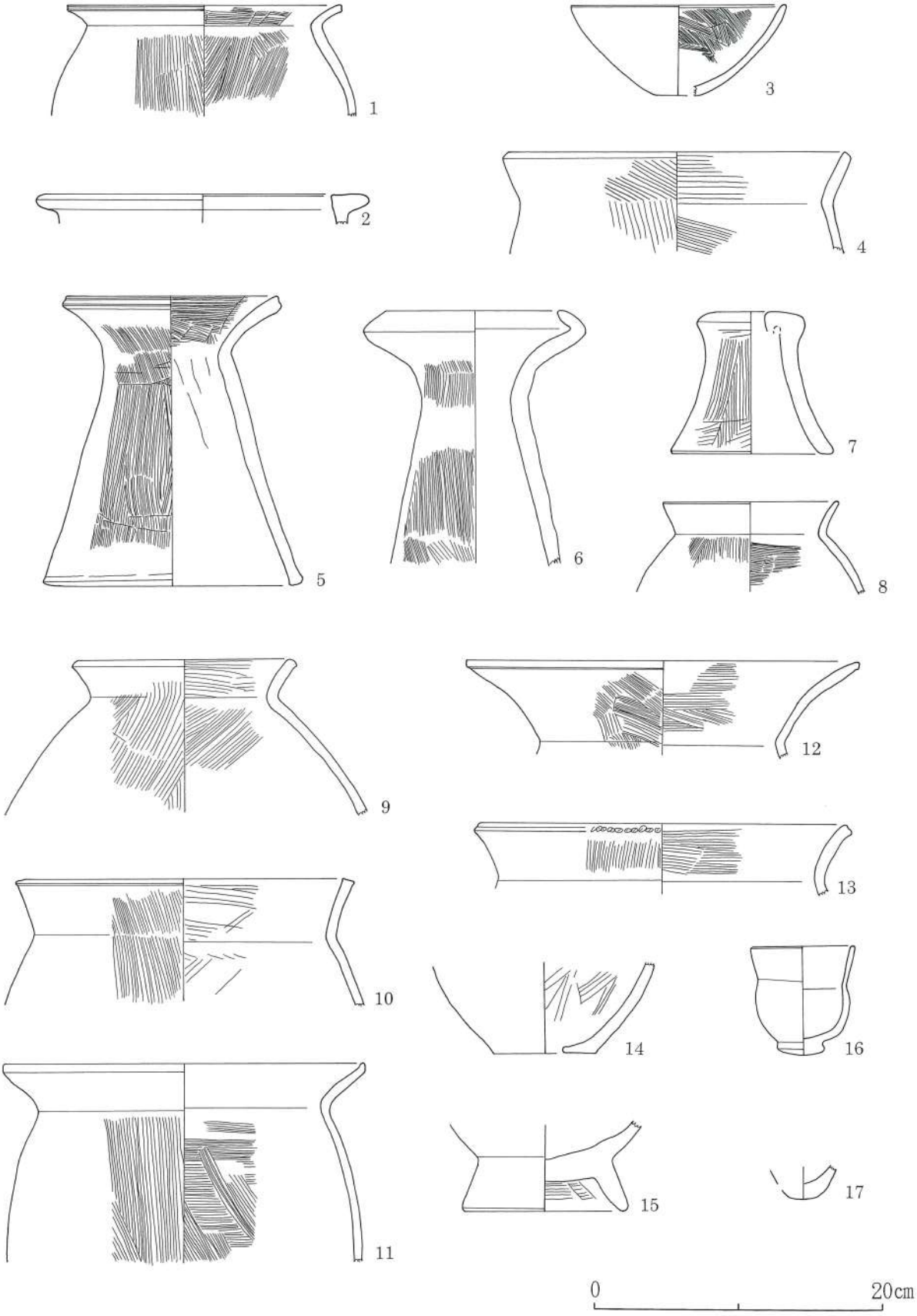


Fig.11　船石遺跡12区 出土遺物実測図（1）（1/4）

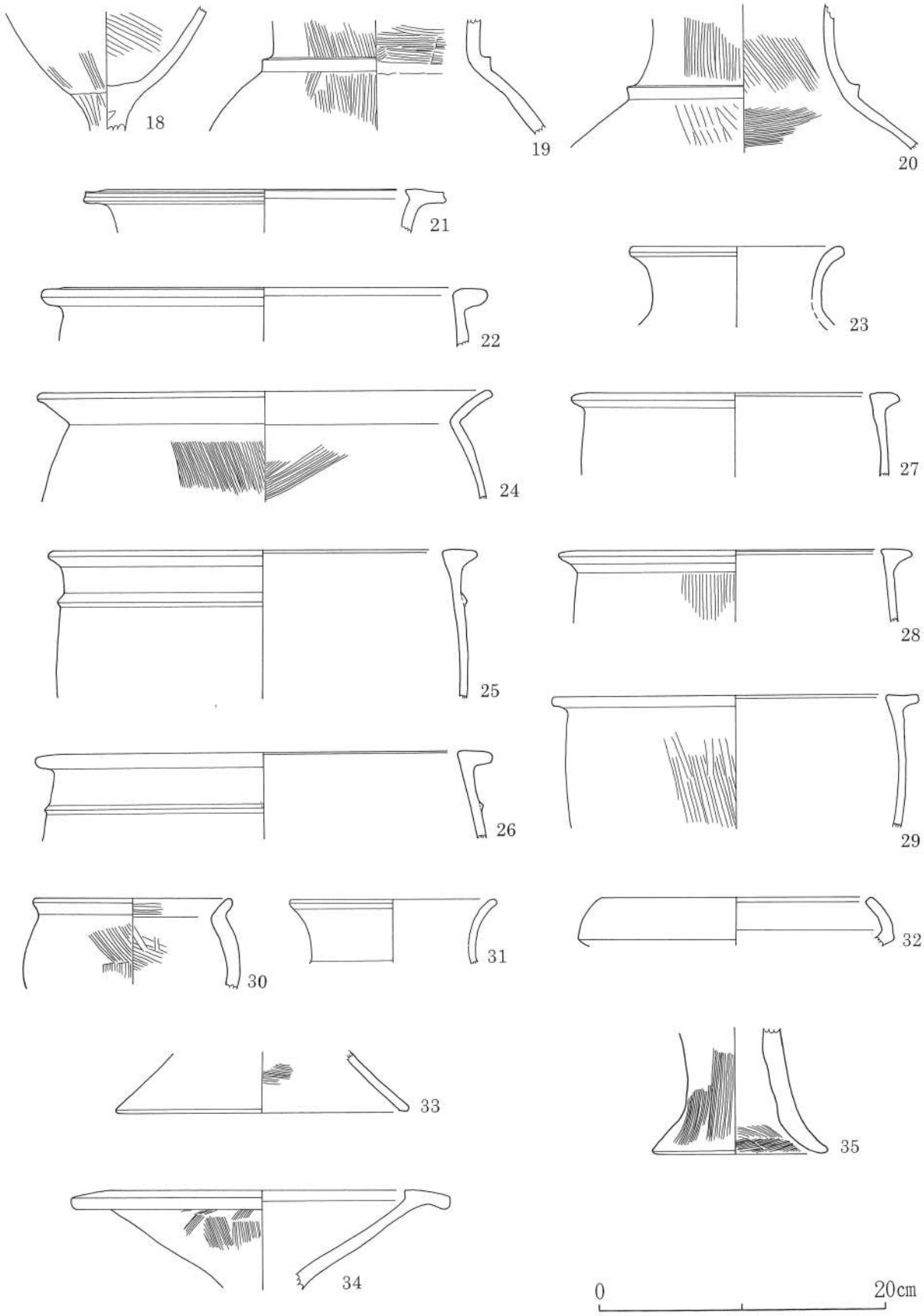


Fig.12　船石遺跡12区 出土遺物実測図（2）（1/4）

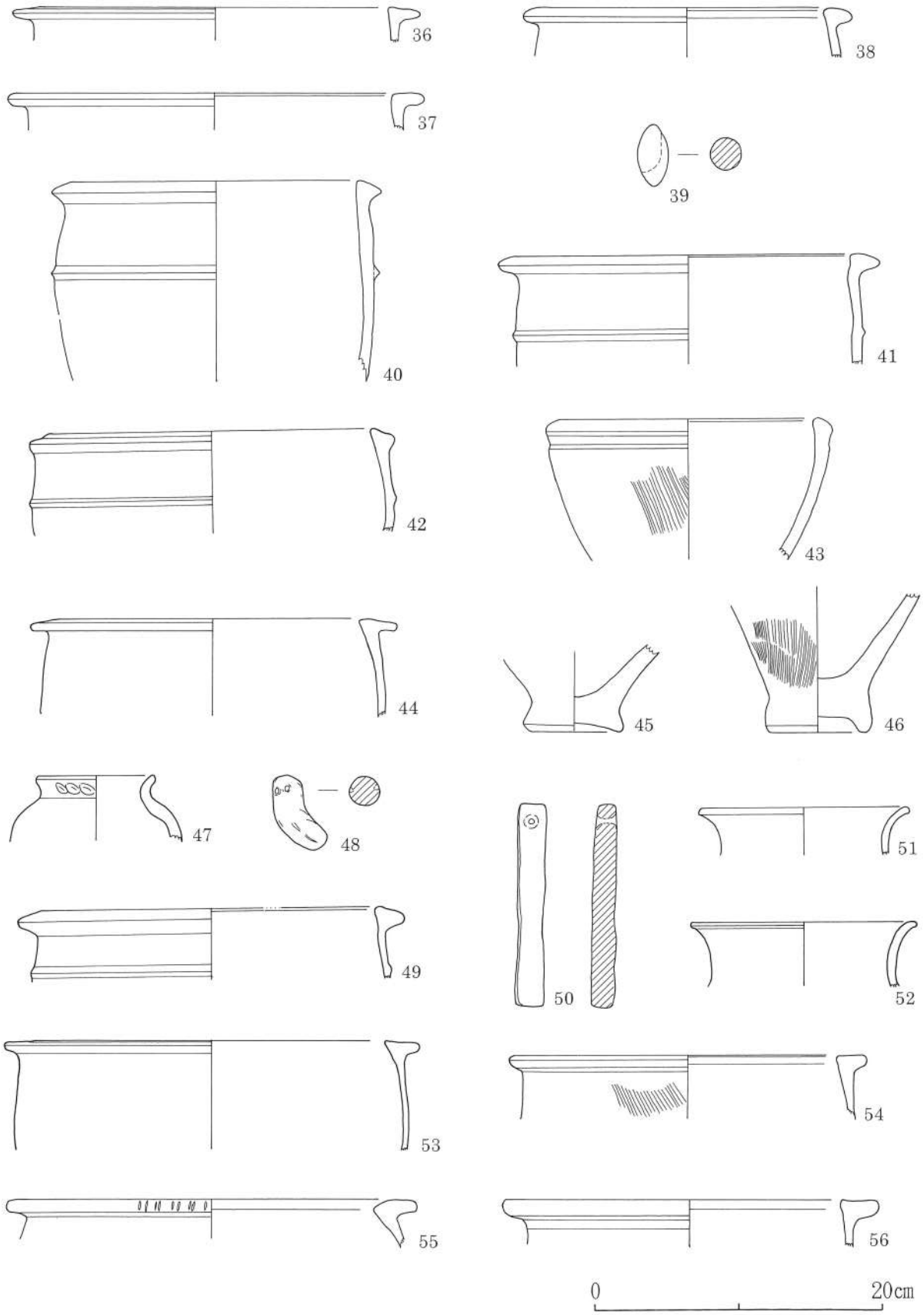


Fig.13　船石遺跡12区 出土遺物実測図 (3) (1/4)

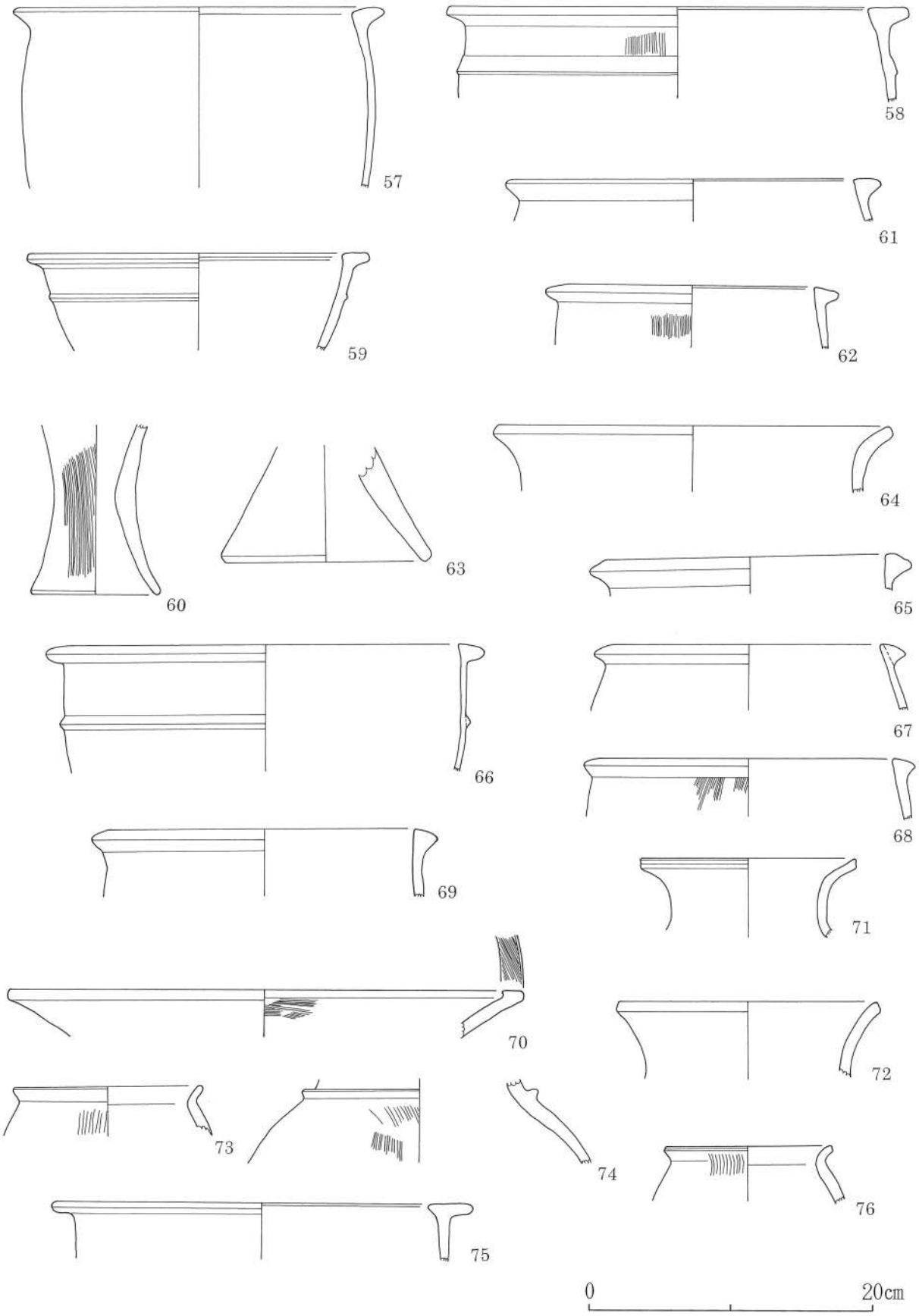


Fig.14　船石遺跡12区 出土遺物実測図（4）（1/4）

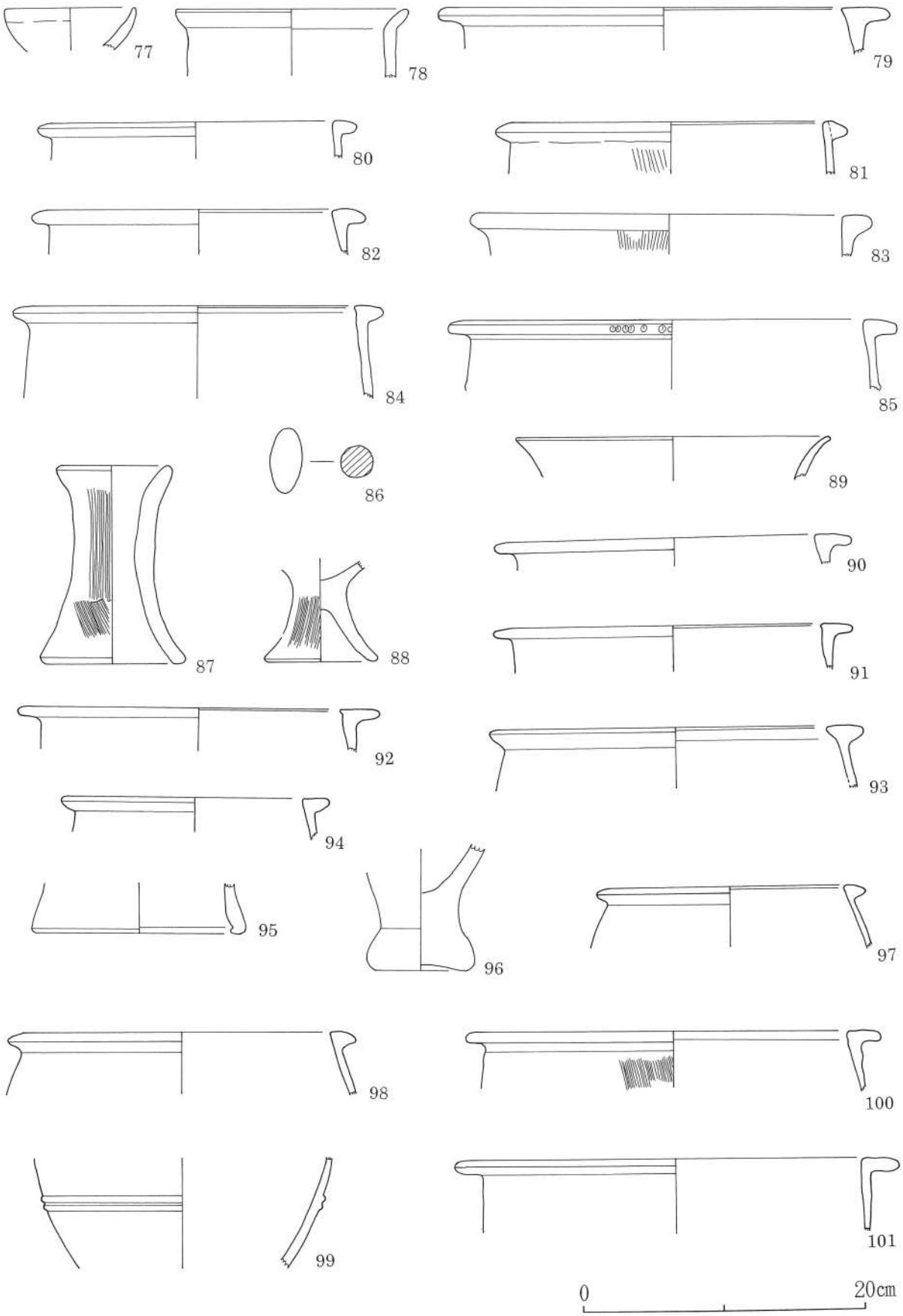


Fig.15　船石遺跡12区 出土遺物実測図（5）（1/4）

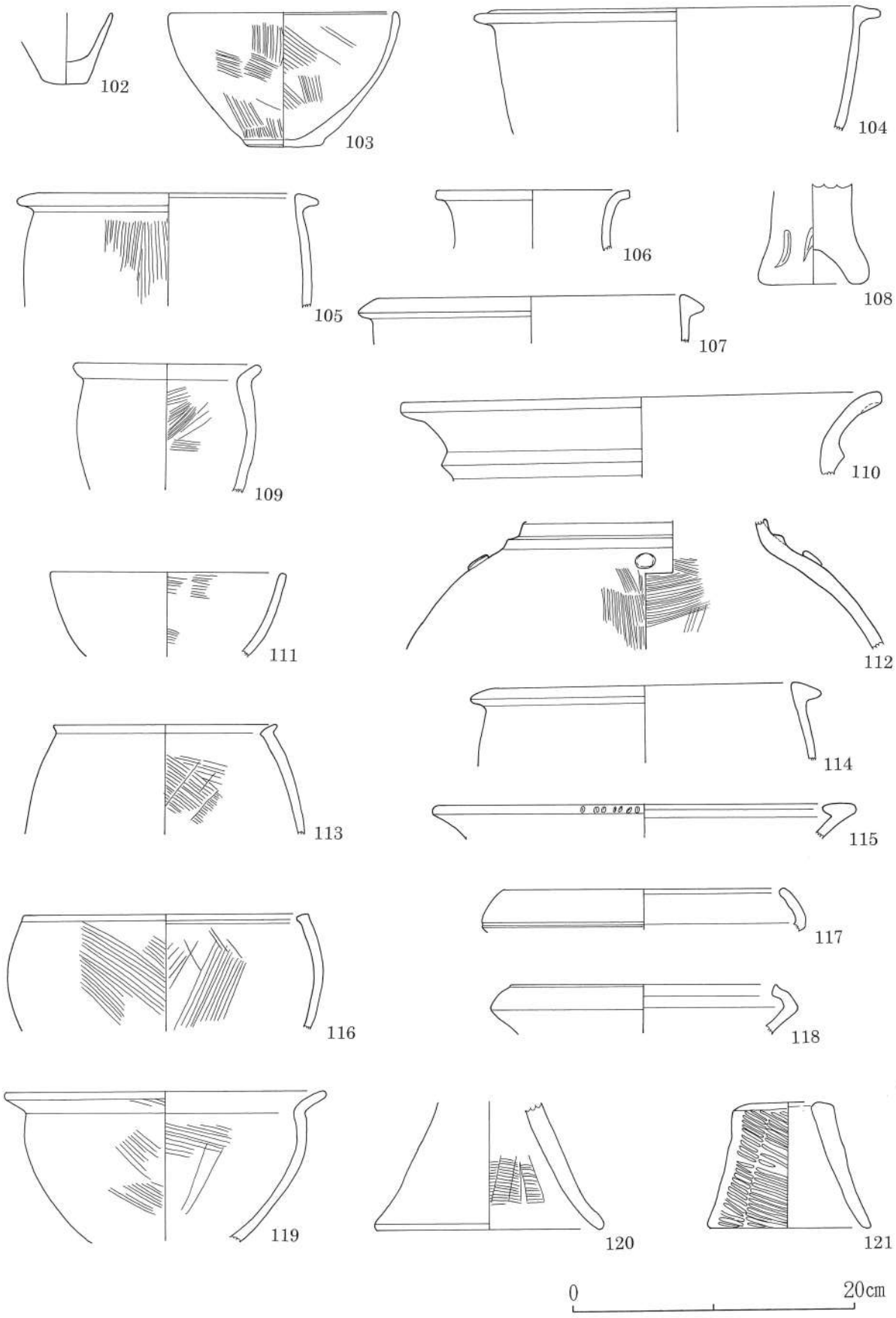


Fig.16　船石遺跡12区 出土遺物実測図 (6) (1/4)

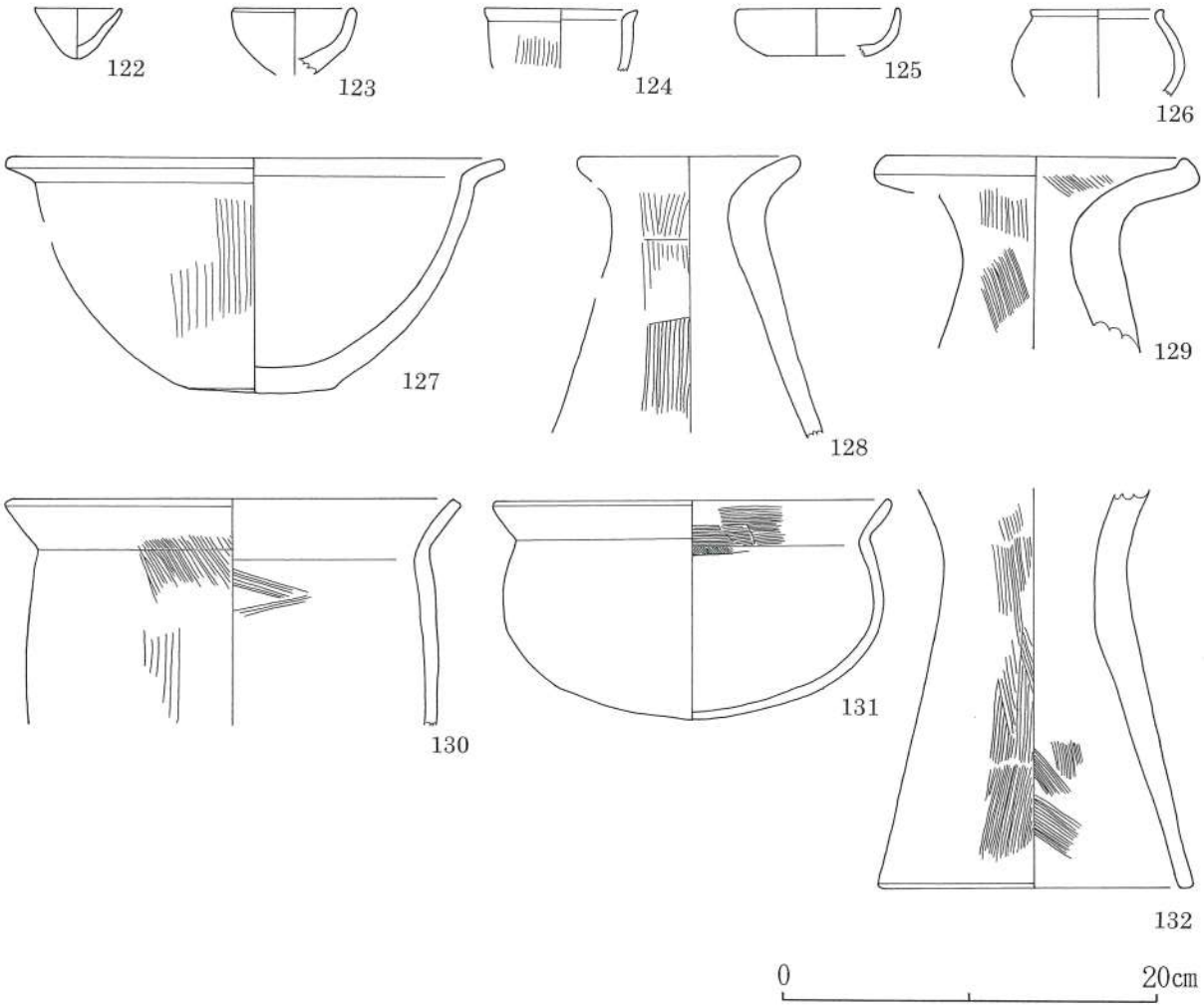


Fig.17　船石遺跡12区 出土遺物実測図（7）（1/4）

Tab. 3　船石遺跡12区　出土土製品・石製品一覧表

遺物No.	器　種	出土遺構	法　量（cm・g）				材　質	備　考
			長　さ	高さ・幅	厚　さ	重　量		
48	土製勾玉？	SK-1212	5.7	直径2.2		28.6		
39	土弾	SK-1210	4.2	直径2.3		16.1		
86	土弾	SH-1227	4.5	直径2.3		20.6		
133	土製円盤	SH-1209	直径4.7		0.9	20.4		
134	石包丁	SH-1209	※8.2	※6.1	0.4	※29.2	泥岩製	
135	片刃石斧	SH-1204	4.2	3.2	0.8	22.7	泥岩製	
50	砥石	SH-1215	14.0	2.0	1.6	75.8	泥岩製	
136	砥石	SH-1223	4.3	2.4	0.7	15.3	泥岩製	
137	石鏃	SH-1227	※2.2	1.8	0.3	※1.3	黒曜石製	
138	掻器	SH-1203	4.2	1.8	0.7	5.6	黒曜石製	
139	掻器	SK-1202	5.3	2.7	0.4	1.0	サヌカイト製	

3．船石南遺跡８区の調査（Fig. 3、18・PL. 1、17）

(1) 遺　構（Fig.18・PL.17）

今回の船石南遺跡８区の調査で検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居址１軒、土壙２基、その他ピッ

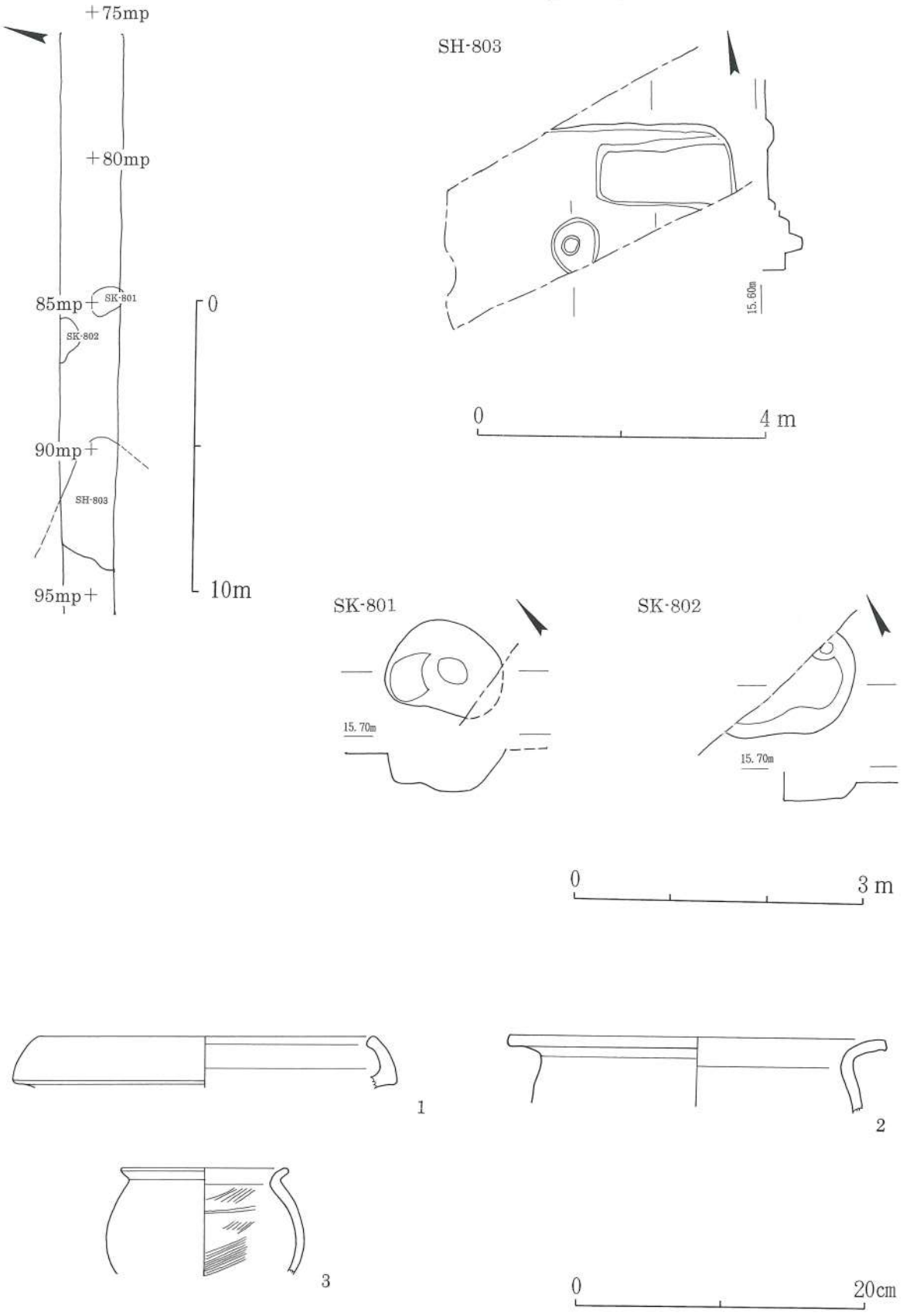


Fig.18　船石南遺跡８区 遺構配置図（1/200）・遺構実測図（1/80・1/60）・遺物実測図（1/4）

トなどであった。しかし、調査区の幅３ｍという制約の中での調査であったため、いずれの遺構についても完掘できなかった。また、調査区の67mp～85mp付近までは遺構は検出されなかった。

竪穴式住居址（Fig.18・PL.１、17）

今回の調査で、竪穴式住居址として取り扱った遺構は、SH-803、１軒であった。前述のように、調査区の幅３ｍという制約の中での調査であったため、住居址全体について調査できなかった。

SH-803は、調査対象地区西端の90mp～94mp付近で検出された方形と考えられる竪穴式住居址。今回の調査区の西限で検出された住居址で、住居の西半部は、船石遺跡と船石南遺跡を分かつ小支谷となっており、遺構とともに地山も失われている。住居の北壁、北東隅、東壁及び床面の一部が検出された。規模は、確認できる部分で東西長は4.0m程、南北長は2.4m程。住居北東隅に長さ1.8m、幅0.8mほどの長方形のベッド状遺構をもつ。主柱穴は不明。床面のほぼ中央と考えられる部分に径0.6m、深さ0.2m程の土壙を持つ。床面積は、検出された部分で6.3m²。床面までの掘り込みの深さは、平均17cm程度。検出された北壁を基準とすると主軸は、N－85°－W程度。出土遺物はない。住居の形態から弥生後期の住居址と考えられる。

土壙（Fig.18・PL.１、17）

今回の調査で検出された土壙は、SK-801、SK-802の2基であった。SK-801は85mp付近で検出された不整楕円形を呈す土壙で、南部の一部が調査区外へ続く。南北長１ｍ以上、幅1.0m、深さ0.3m、底面積0.3m²。SK-802は85mp付近で検出された楕円形を呈すと考えられる土壙で、北部の一部が調査区外へ続く。長軸長1.4m以上、短軸長0.9m以上、深さ0.25m、検出部分で底面積0.3m²。出土遺物から弥生後期の土壙と考えられる。

(2) 遺　物（Fig.18・PL.17）

今回の調査で出土した遺物は少量で、図示できるものはSK-802から出土した弥生式土器3点のみであった。

１は袋状口縁の壺。内外面ともにナデ。２は頸部が「く」の字形にくびれ口縁が大きく開く甕。内外面ともにナデ。３は体部が球形に近い広口壺。頸部が「く」の字形にくびれ、短い口縁が開く。内面ハケ目、外面ナデ。

４．まとめ

今回の船石遺跡12区及び船石南遺跡８区の発掘調査は、それぞれの調査区の延長が約175m、約27m、幅約３m、調査面積600m²という制約の中での調査であった。しかし、今回の調査は、くしくも両遺跡を縦断あるいは横断する形で試掘溝を設定し、遺構の有無及びその密度について確認調査を実施した結果となった。

その結果、船石遺跡側では、昭和61年度の農業基盤整備事業に伴い調査を行った部分に並行する部分はもちろん、長崎本線から南の延長約100m部分についても、かなりの密度で弥生時代の遺構が現在の圃場の地下に遺存していることを明らかにできた。

加えて、船石遺跡側では遺構分布の南限を、船石南遺跡側では遺構分布の西限を確認できたことも併せて今回の調査成果といえる。とくにそれぞれの限界で検出された竪穴式住居址が丘陵とともに失われ谷部へ移行していた。このことは、現在両遺跡の境界となっている侵食谷が比較的新しい時期の所産であることを示唆しており、船石遺跡・船石南遺跡の両遺跡が営まれていた弥生時代当時、集落あるいは墓域としての区分はあったものの、一つの有機体としてとして営まれていたことも推測される。

図　　版

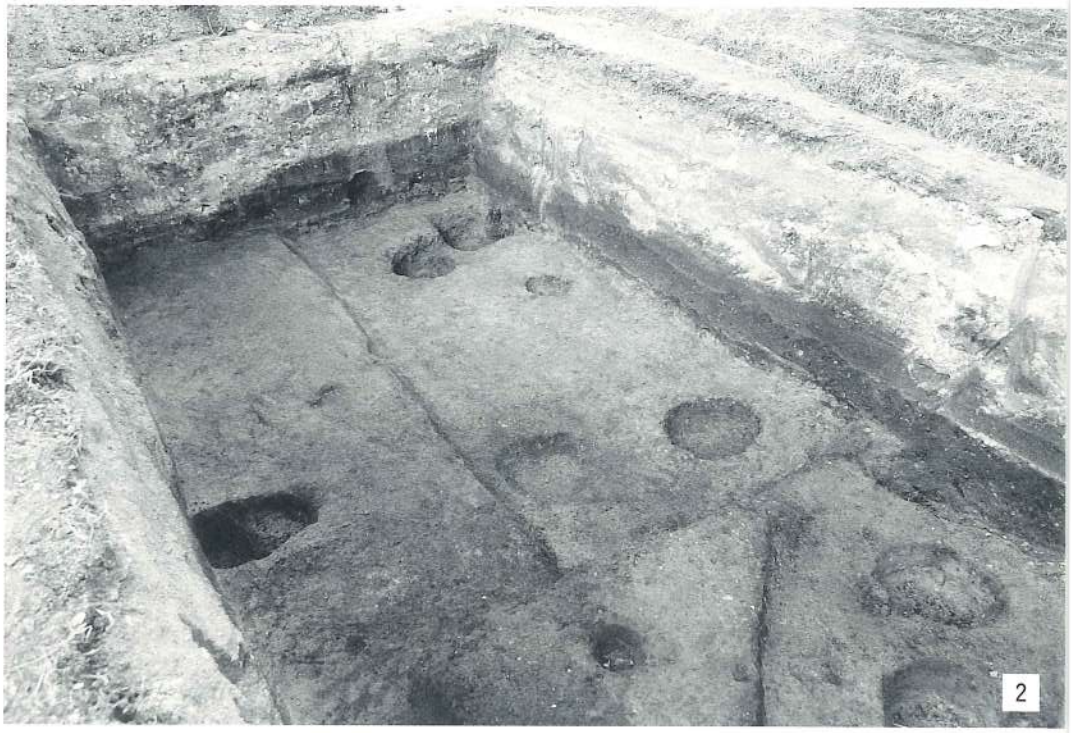
1　船石遺跡12区　110mp～175mp付近　－南より－

2　船石南遺跡８区　75mp～95mp付近　－西より－

1　SH-1202　－北より－

2　SH-1201/SH-1202　－東より－

3　SH-1203～SH-1205　－南より－



1　SH-1204　－北より－

2　SH-1206　－南西より－

3　SH-1208　－北東より－

1　SH-1209　－北西より－

2　SH-1211　－南西より－

3　SH-1213　－南より－

1　SH-1215　－北より－

2　SH-1217　－南西より－

3　SH-1218　－東より－

1　SH-1221　－西より－

2　SH-1222　－北より－

3　SH-1223　－南西より－

1　SH-1224　－北西より－

2　SH-1226　－南東より－

3　SH-1227　－西より－

1　SH-1228　－北より－

2　SH-1230/SK-1231　－南より－

3　SH-1233　－北より－

1　SH-1234　－東より－

2　SH-1235　－南より－

3　SH-1236/SH-1237/SK-1238
　　－北より－

1　SK-1239/SH-1240　－南より－

2　SK-1242/SH-1243　－北より－

3　SH-1246/SK-1247　－南より－

1　SK-1210　－東より－

2　SK-1212　－西より－

3　SK-1214　－東より－

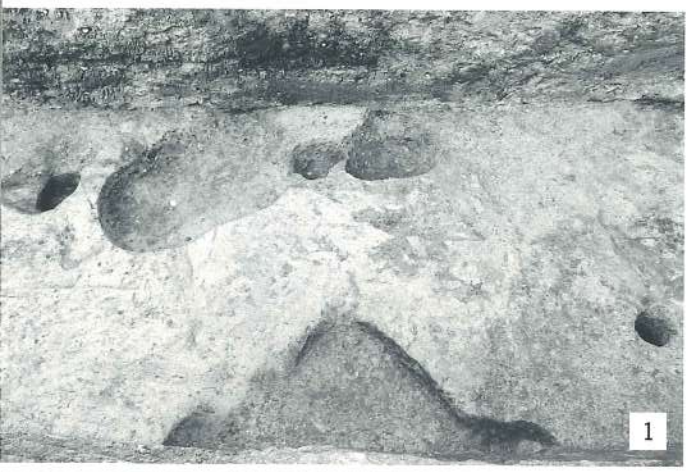
4　SK-1216　－北西より－

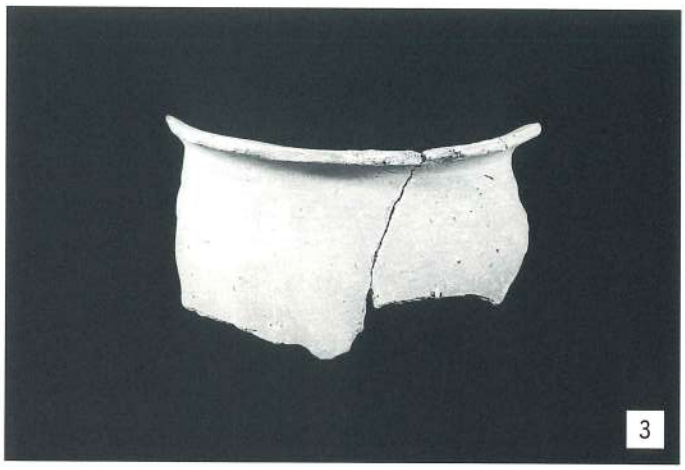
5　SX-1219　－西より－

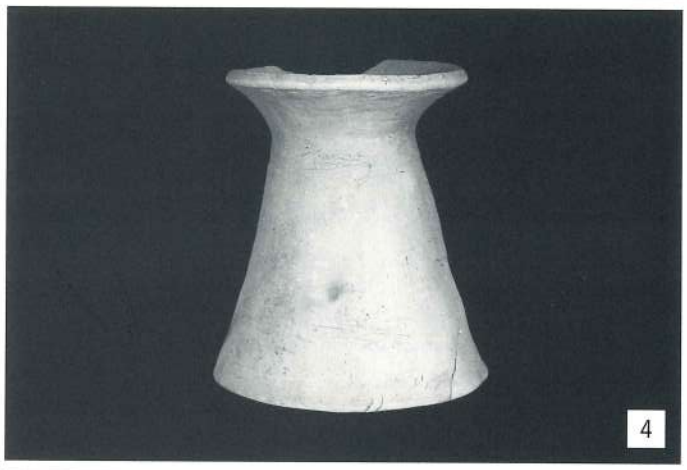
6　SK-1220　－西より－

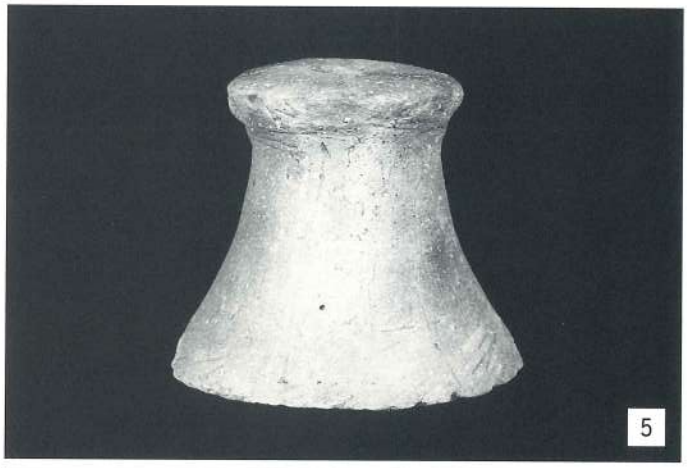
7　SK-1225　－南より－

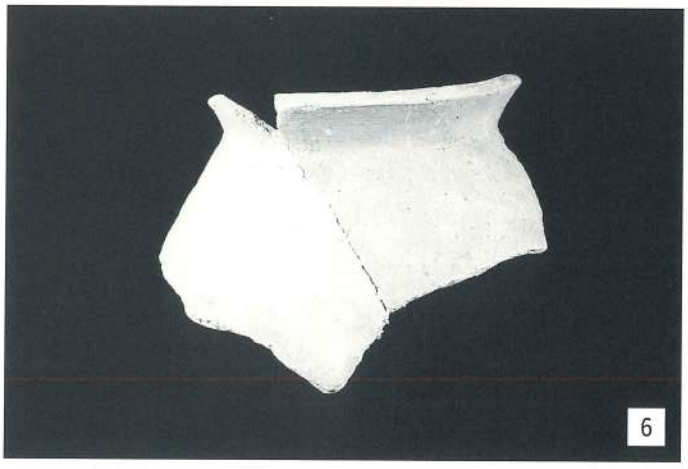
8　SK-1239　－西より－











1　SK-1244　－東より－

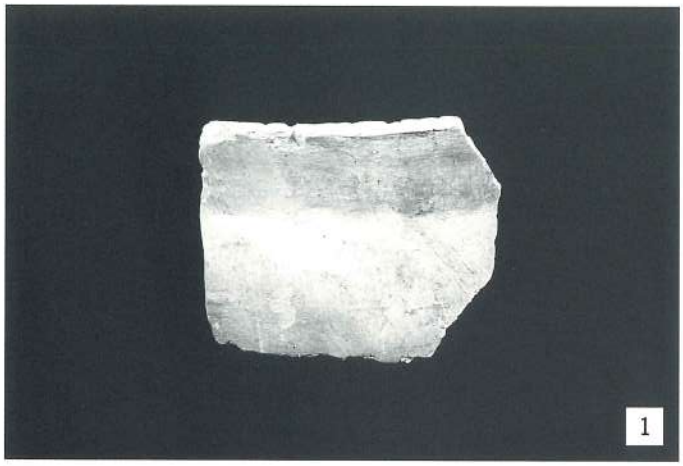
2　SK-1248　－西より－

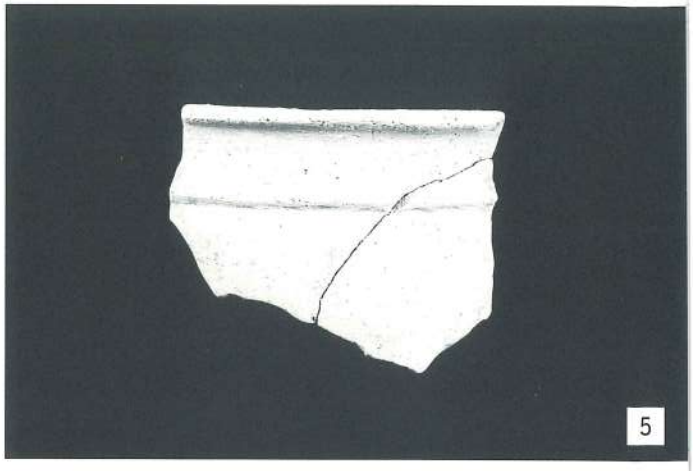
3　1　SH-1202出土

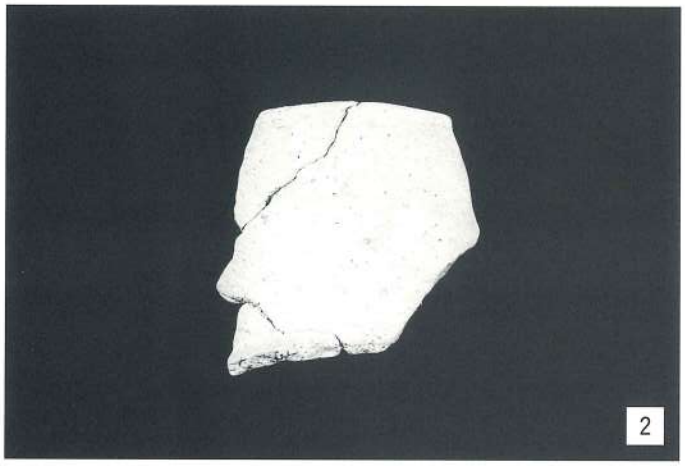
4　5　SH-1204出土

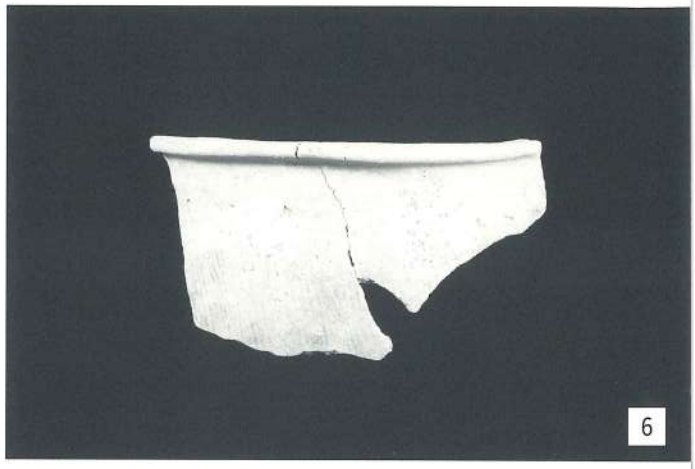
5　7　SH-1204出土

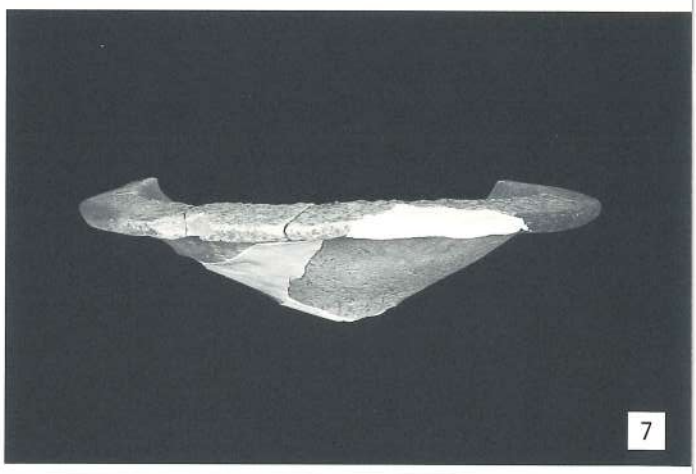
6　9　SH-1204出土

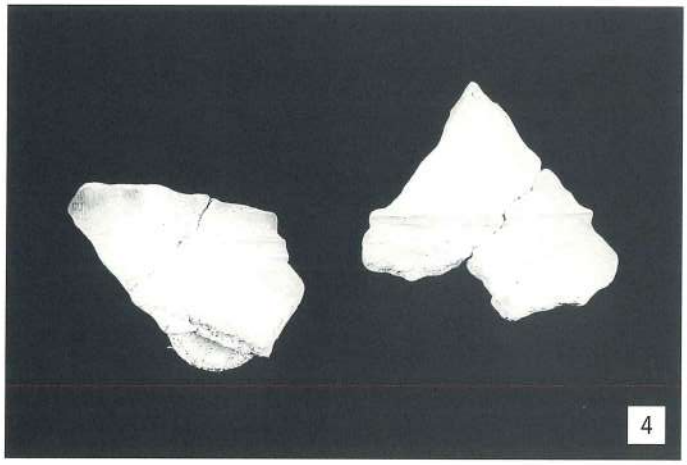


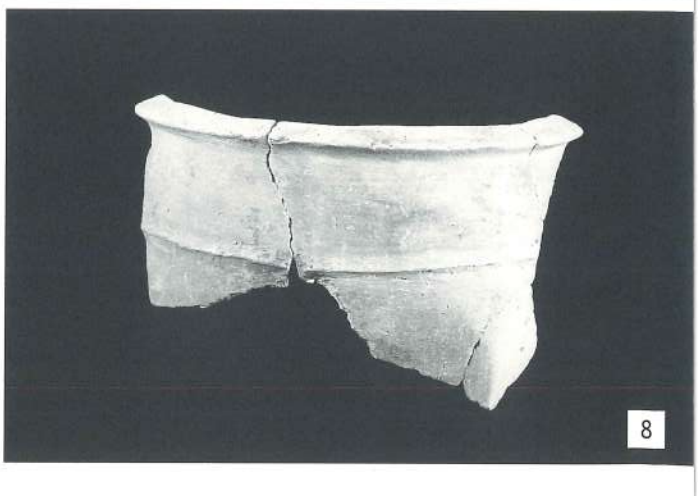












1　10　SH-1204出土

2　12　SH-1204出土

3　16　SH-1204出土

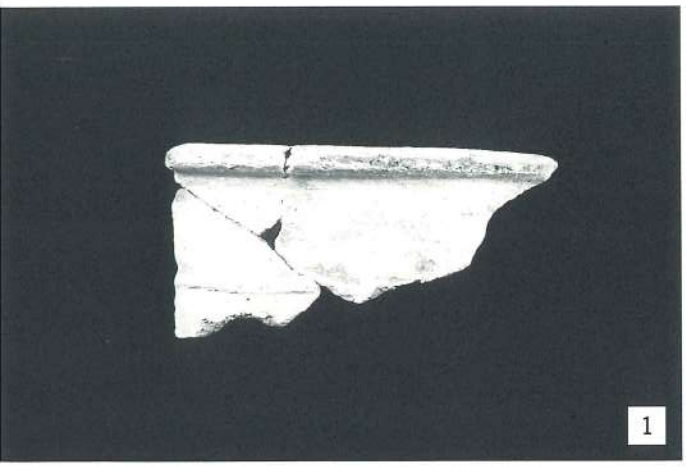
4　19・20　SH-1204出土

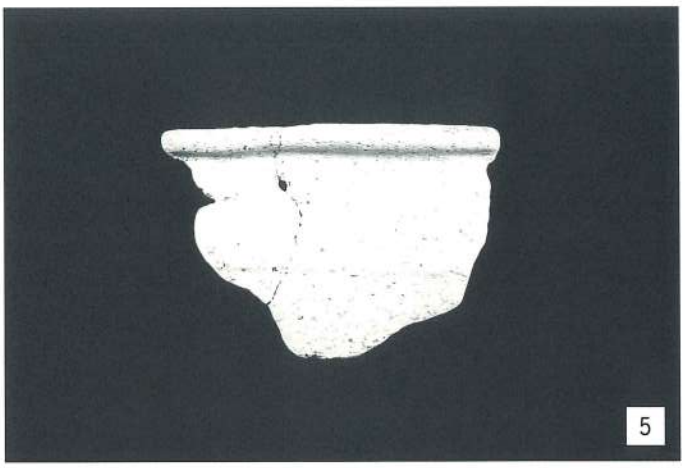
5　25　SH-1209出土

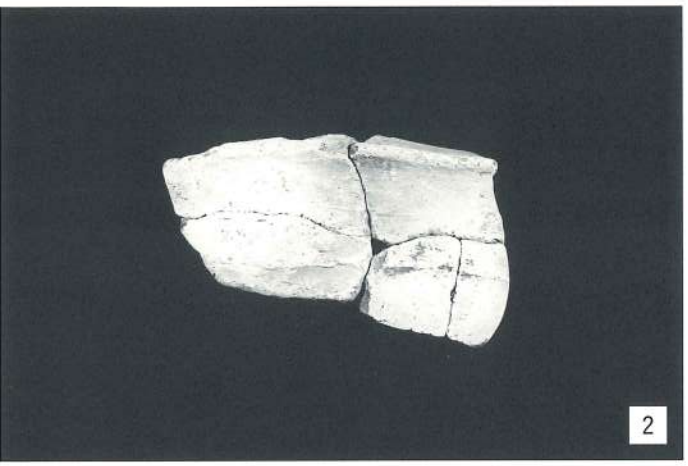
6　29　SH-1209出土

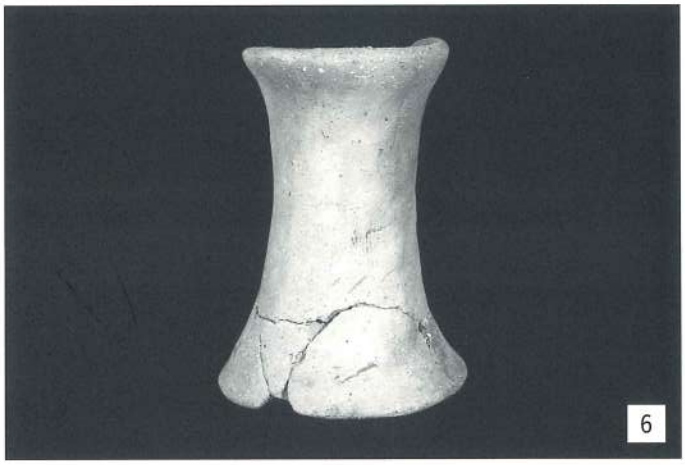
7　34　SH-1209出土

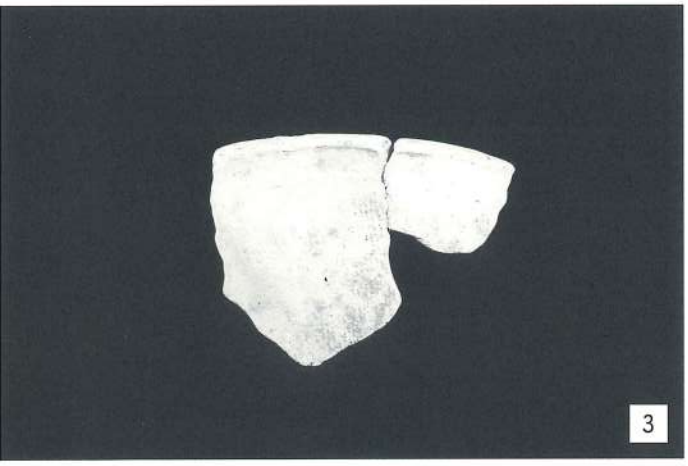
8　40　SK-1212出土

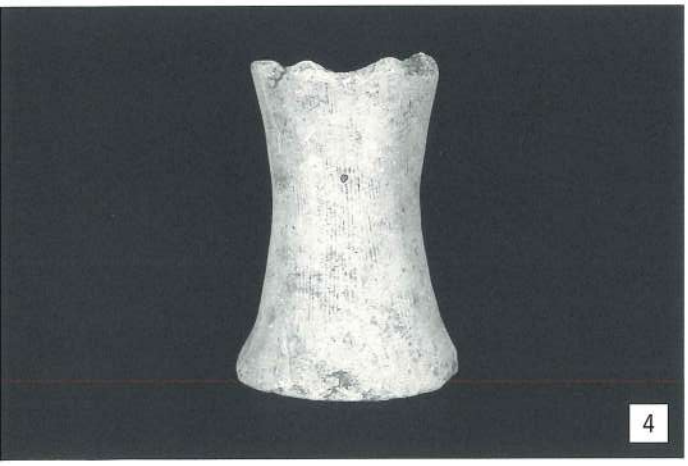




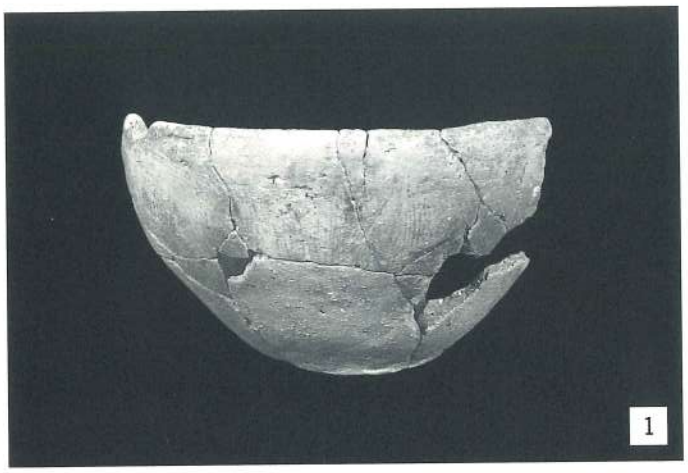


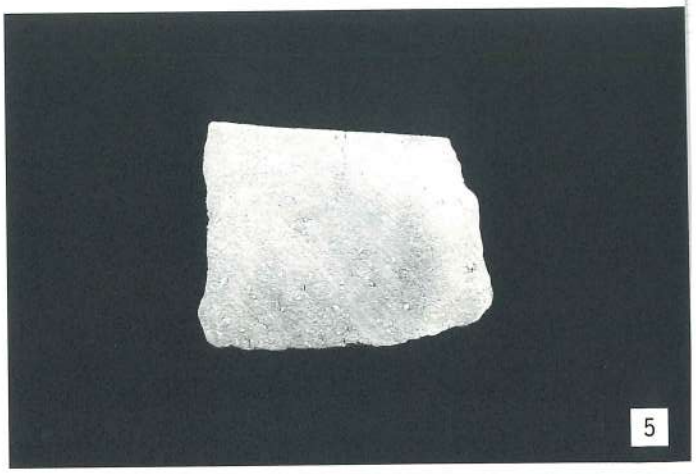


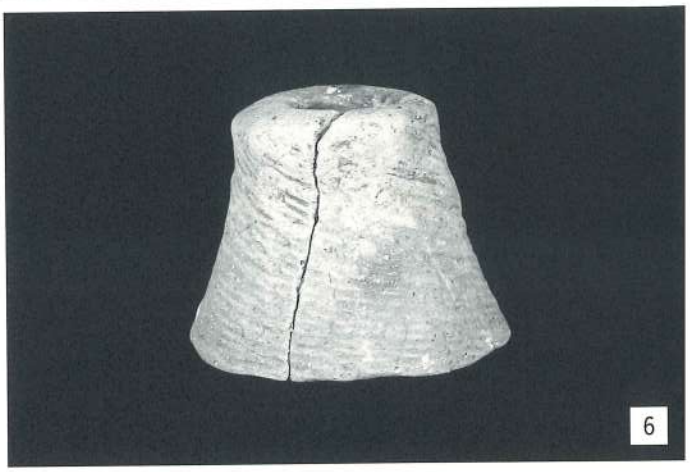


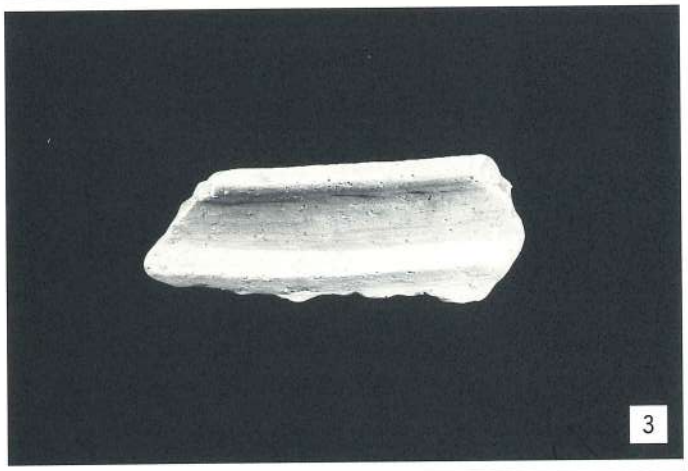


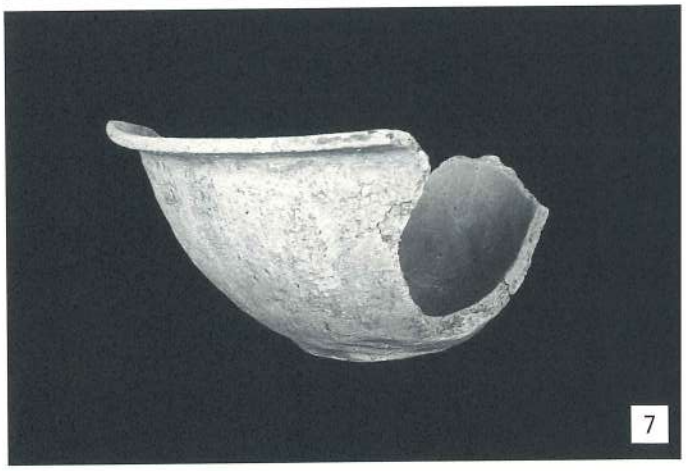
1	41	SK-1212出土
2	42	SK-1212出土
3	43	SK-1212出土
4	60	SK-1216出土
5	66	SH-1221出土
6	87	SH-1227出土
7	88	SK-1227出土
8	102	SH-1233出土

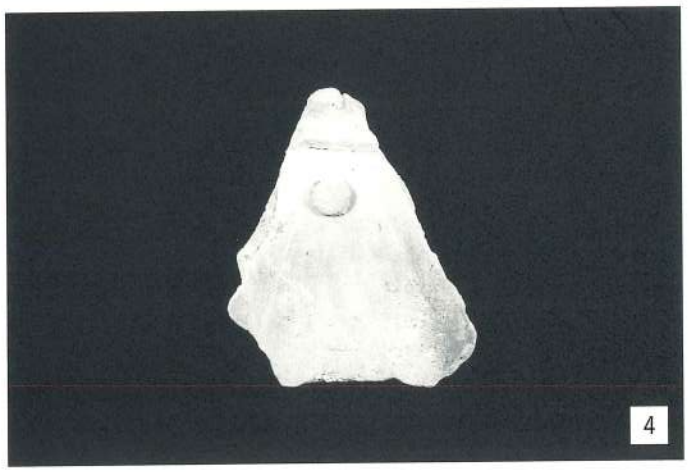












1　103　SH-1233出土

2　108　SK-1234出土

3　110　SH-1235出土

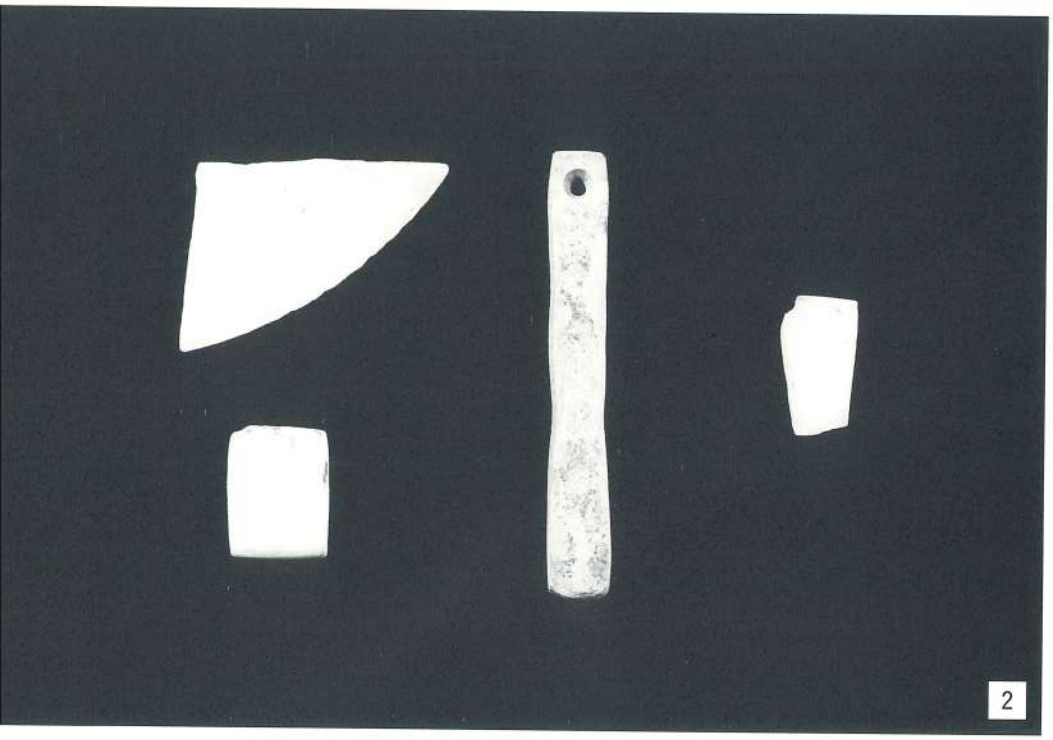
4　112　SH-1235出土

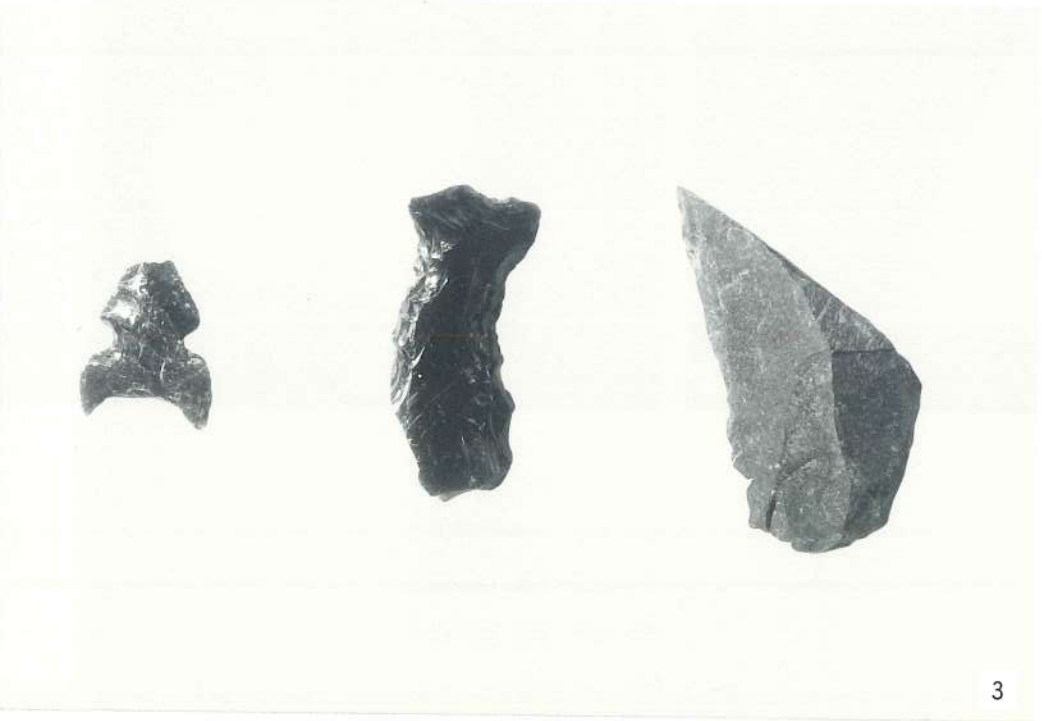
5　116　SH-1235出土

6　121　SH-1235出土

7　127　SH-1236出土

8　130　SH-1243出土





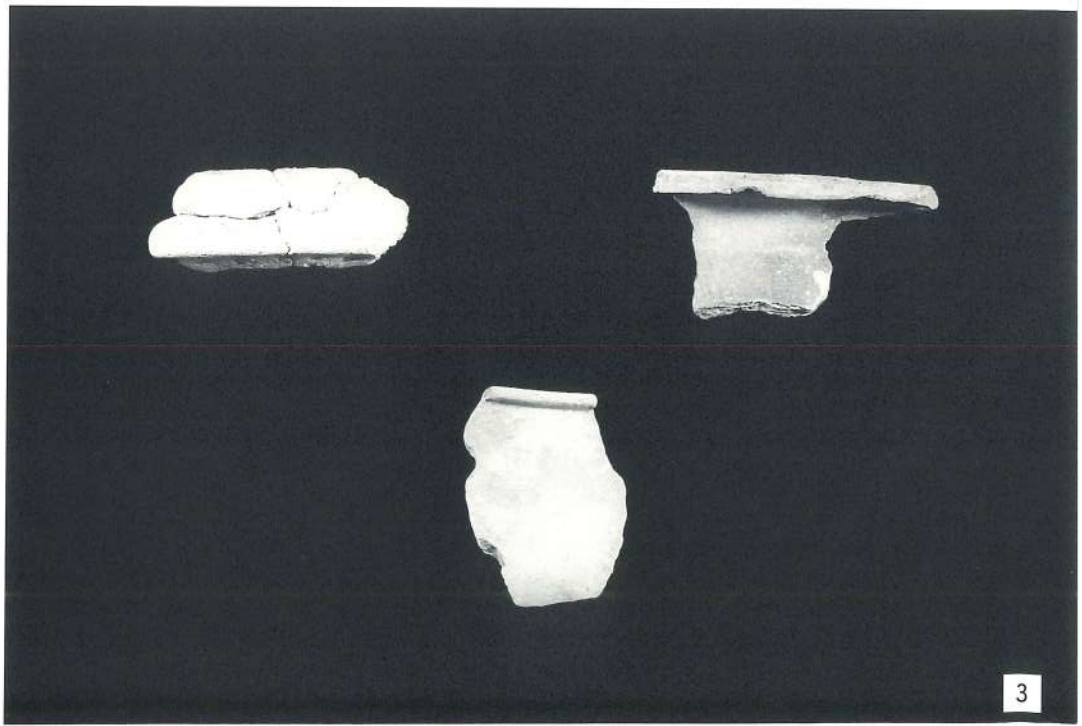
1　48・39・86・133

2　$\frac{134}{135}$・50・136

3　137・138・139

1

2



3

1　SH-803　－北より－

2　SK-801/SK-802　－北より－

3　1・2
　　3

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないしいせきⅥ・ふないしみなみいせきⅣ
書名	船石遺跡Ⅵ・船石南遺跡Ⅳ
副書名	平成11年度佐賀県営かんがい排水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	原田　大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	〒849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町民センター内　Tel/Fax 0952-52-3833
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
船石遺跡 (ふないしいせき)	佐賀県三養基郡 (さがけんみやきぐん) 上峰町大字堤字 (かみみねちょうおおあざつつみあざ) 一本谷 (いっぽんだに)	41345	1002 2008 3016	33°20′12″	130°25′42″	1999.11.24 ～ 2000. 3. 3	520m²	県営かんがい排水事業
船石南遺跡 (ふないしみなみいせき)			2010	33°20′11″	130°25′46″		80m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船石遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴式住居址　30軒 土壙　18基	弥生式土器（中期～後期） 土製勾玉 土弾 土製円盤 石包丁 片刃石斧 砥石 石鏃 掻器	
船石南遺跡			竪穴式住居址　1軒 土壙　2基		

上峰町文化財調査報告書第24集

船石遺跡Ⅵ・船石南遺跡Ⅳ

平成15年3月20日 印　刷
平成15年3月31日 発　行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印　刷　大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20